

第66回 日米学生会議 活動報告書

主催：一般財団法人 国際教育振興会

企画 / 運営：第 66 回日米学生会議 実行委員会

INDEX

日米学生会議とは	4
第 66 回日米学生会議 実行委員長挨拶	5
日米学生会議の歴史	6
第 66 回日米学生会議 概要	8
分科会活動 総括文	14-41
芸術とアイデンティティ	14
環境問題における国家、企業、市民の役割	18
移民の功罪と展望	22
現代における歴史教育とその社会的影響	26
正義と道徳	30
日米関係におけるスマートパワー	34
技術進歩と社会	38
分科会論文例の紹介	42
第 66 回日米学生会議 代表団の声	51
賛助企業・団体 ご協力いただいた方々	52
パブリシティ一覧	58



What is JASC?

日米学生会議とは



日米学生会議 (Japan-America Student Conference—JASC) は、日本初の国際的な学生交流団体である。米国の対日感情の改善、日米相互の信頼回復を目指し、「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念の下、1934年に発足した。

以来日米学生会議は、日米関係を考察するとともに、両国をめぐる様々な問題について、多角的に検討してきた。しかし、近年のグローバリゼーションの進展と新興国の発展を経て、今日ではより広く多様な問題を日米の観点のみならずグローバルな視点から考えることが求められている。

本会議では、日本と米国から同数の学生が約一ヶ月にわたって共同生活を送りながら様々な議論や活動を行い、会議全体を通して、様々な世界の問題に対して学生同士の活発な議論を行うとともに、日米両国の参加者間の相互理解を深めていくことを目的としている。そして、参加者たちが会議で得た成果を長期的に社会的貢献、社会還元していくことを目指している。



Greetings

日米学生会議 実行委員長挨拶

8月12日の深夜、寒風吹きすさぶサンフランシスコ。私たち16名の実行委員は宿泊地であるカリフォルニア大学バークレー校フリーボーン寮のロビーに集い、円をなして座っていた。空気は張りつめ、とても重い。その日の午後は分科会ごとの自由行動であったが、実行委員同士の連携ミスや参加者の遅刻が目立ち、危うく口論になりかけたほどであった。第66回日米学生会議も折り返し地点を迎え、疲労とストレスが積み重なってチームにはほころびが生じはじめていた。それを敏感に察知した米国側委員長 Anna が全員で思いを共有しあうことを提案し、今、臨時のミーティングが開かれているのである。一人が他の委員の怠惰に対して苛立ちを露わにすると、ある者は運営担当としての重圧に耐えきれず涙を流し、またある者は自分の役割の至らなさに負い目を感じていると告白した。各々の感情が堰を切ったように溢れ出し、ぶつかりあった。傍目には、それは負の感情が渦巻く破壊的な時間のようにも映るであろう。しかし私たちは皆、reflection と呼ばれるこの時間こそが、チームとして苦難を乗り越え、前進するために必要不可欠であり、むしろそれは創造的な営みであることを知っていた。全員が話し終えると、誰からともなく抱擁を交わしあった。間もなく任を終えるサンフランシスコのコーディネーターを皆でねぎらい、先ほどまで涙を流していた者は持ち前のジョークで笑いを誘った。空気はじわじわと暖かみを取り戻し、翌朝のミーティングには、疲れてはいるが晴れやかな16名の顔があった。それぞれに異なった感じ方や考え方を、正直に伝えて理解し合うことで、改めて絆を強くした瞬間であったと思う。

人は皆、自分だけの感性をもっている。勝負に敗れたときの砂を噛むような悔しさ、社会の不条理に対する憤り、信じがたい振る舞いをする他者への拒絶、仲間とともに大きなプロジェクトをやり遂げた達成感。そうしたものは、時に社会では私情と呼ばれ、あるいは個人的見解と呼ばれ、表に出さないことが要請される。確かに円滑なコミュニケーションのためにはそうした自制が必要かもしれない。しかし、心の奥底にある叫ばなければやりきれない思いを相手に伝え、そして相手からも思いを聞くこと、それにより生まれる相互理解を私たちは本能的に欲しているはずである。正直でいることは、心地よいものであり、また大きな力を持っている。自分という個性のままに、仲間と一緒に笑い合い、泣き合うことが、どれほど強い絆を生むことか。

もちろん、世界はもっと複雑である。日米関係は、1945年の占領以来、憲法改正や沖縄の基地問題など、パートナーシップやトモダチといった美辞麗句だけでは語れない難しさをはらみ続けており、政府はそうした過去からの制約を免れ得ない。また東南アジア経済の急成長やアフリカ地域での疫病の蔓延などの動向に、企業間の取引は影響を受ける。

今、社会がそんな状況にあるからこそ、特定の権威や利害にとらわれない学生が、真っすぐに意見をぶつけ合わなければならない。そうすることではじめて何十年も続く真の友情が結ばれるであろう。

本書は、そんな思いを胸に一夏を過ごした学生たちの記録である。71名の学生が何を語り、何を考え、何を得たのか。この一冊が代表团にとって、あの嵐のような日々を永遠に心に刻み、その経験と成果を世界へと発信し、そして平和へのささやかな一歩を踏み出す礎となることを願ってやまない。

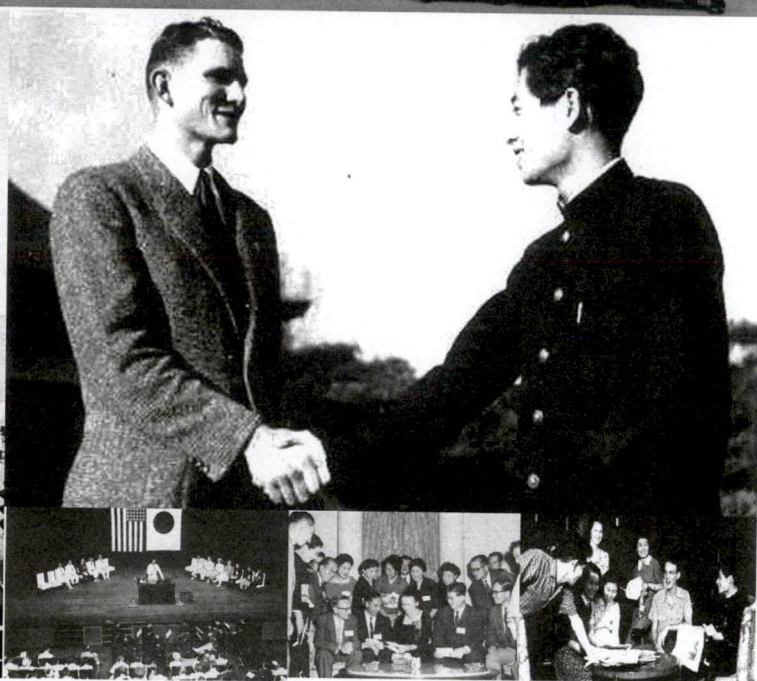


平成26年12月 歴史の積もったプレハブの事務所にて

第66回日米学生会議実行委員長
小松崎遥平



History 日米学生会議の歴史



「世界の平和は太平洋の平和にあり、
太平洋の平和は日米間の平和にある。
その一翼を学生も担うべきである」

1934年。満州事変以降悪化していた日米関係の中で、4人の日本人学生が「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という想いを抱き、太平洋を渡った。日本初の国際的な学生交流プログラム『日米学生会議』の始まりである。創設時より学生自身の手による会議の企画、運営が行われ続け、太平洋戦争勃発に伴う会議中断をはじめ幾多の困難を乗り越えながら現在までの歴史を築き、第66回会議が開催された2014年には80周年を迎えた。学生たちが世界のさまざまな問題を議論し、率直な対話で相互理解を深め、将来の平和の実現に貢献するという創設時の理念は今日まで継承されている。



主催 団体	日米学生会議の系譜		主要な世界の出来事
日本英語学生協会		1931	満州事変
	日米学生会議発足	1934	
	青山学院大学にて第1回会議開催		
	リードカレッジにて第2回会議開催	1935	
	第6回会議開催、宮澤喜一氏参加	1939	第二次世界大戦勃発
日本国際学生協会	津田英学塾にて第7回会議発足、断絶	1940	
		1945	終戦、米国による日本占領開始
	日米学生会議復活、第8回会議開催	1947	
		1950	朝鮮戦争勃発
	第12回会議開催 ヘンリー・キッシンジャー氏参加	1951	サンフランシスコ講和条約および日米安全保障条約締結、日本主権回復
国際教育振興会	コーネル大学にて第15回会議、国際学生会議に発展解消	1954	
		1960	ベトナム戦争勃発
	日米学生会議 2度目の復活、リードカレッジにて第16回会議開催	1964	東京オリンピック開催
	国際教育振興会が主催団体に	1972	沖縄返還
	第25回会議開催、日米各地を巡りながら議論する形態に発展	1973	円が変動為替相場制に移行 米軍が南ベトナムより撤退
	米国側主催団体 JASC, Inc. 設立	1979	
		1985	プラザ合意
		1989	ベルリンの壁崩壊
		1991	湾岸戦争勃発、ソビエト連邦崩壊
		2001	アメリカ同時多発テロ事件
	JASC, Inc. が International Student Conferences に改名	2007	
		2011	東日本大震災発生
	第66回会議開催、80周年式典挙行	2014	
	第67回日米学生会議 開催	2015	第二次世界大戦集結 70周年



Outline of the 66th JASC

第 66 回日米学生会議 概要

【主催】 一般財団法人国際教育振興会
【企画・運営】 第 66 回日米学生会議実行委員会
【後援】 外務省、文部科学省、米国大使館、日米文化センター、一般社団法人日米協会
【賛助】 公益財団法人三菱 UFJ 国際財団、公益財団法人双日国際交流財団、公益財団法人平和中島財団

【テーマ】 「文化の交差から創る道 ～学生が受け継ぐ 80 年の平和への歩み～」
-Communicate and Connect: Pursuing Peace at the Crossroads of Culture-

【開催期間】 会議開催期間：2014 年 8 月 2 日～2014 年 8 月 25 日
事業実施期間：2014 年 4 月 1 日～2015 年 3 月 31 日

【参加者】 日本側 35 名（実行委員 8 名を含む）
米国側 36 名（実行委員 8 名を含む） 計 71 名

【開催地】

①デモイン（アイオワ州） ②サンフランシスコ（カリフォルニア州）
③ニューヨーク（ニューヨーク州） ④ワシントン D.C.

【会議準備活動】

第 65 回日米学生会議の参加者から選出され、発足した実行委員会が、日本側の主催団体である一般財団法人国際教育振興会、米国側は ISC, Inc. の協力の下、本会議開催のための準備活動を行う。4 月に参加者決定後、所属分科会のテーマに関するレポートを作成し、講演会や勉強会、合宿などの事前準備を行い、夏の本会議に臨む。

【本会議におけるプログラム】

《分科会（略称 RT）》

本会議の活動の中心となる分科会は 7 つ設けられており、日米各 5 名の学生が 1 つの分科会を構成し議論を重ねることとなる。分科会は本会議中だけでなく事前活動においても、参加者が共同生活するための「チーム」としても機能している。

*第 66 回会議における分科会は以下の通りである。

- (1) Art and Identity
芸術とアイデンティティ
- (2) Environmental Initiatives for a Sustainable Future
環境問題における国家、企業、市民の役割
- (3) Immigration in the Modern Era
移民の功罪と展望
- (4) Modern Consequences of Historical Education
現代における歴史教育とその社会的影響
- (5) Morality and Justice
正義と道徳
- (6) Smart Power in US-Japan Relations
日米関係におけるスマートパワー
- (7) Technological Advancements and Society
技術進歩と社会





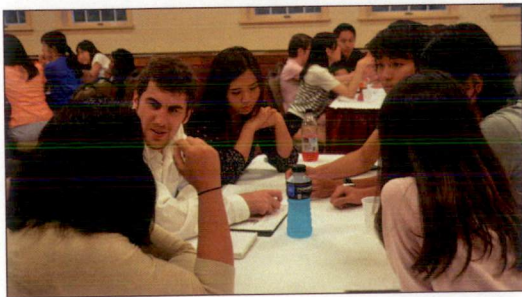
《フィールドトリップ》

分科会の議題や開催地についての理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、NGO、NPO や研究所などへ訪問研修を実施する。議論の対象となっている現場や現状を知ることができる貴重な機会であり、議論に必要な多様な具体的な視点を得るために重要な活動となる。



《フォーラム》

各開催地でサイトテーマや日米両国に深く関わるトピックについて一般公開のフォーラムを開催し、第一線で活躍する専門家、有識者の講演や現地学生を交えたパネルディスカッションを行い、その地域特有の事情や新たな視点も得て参加者は開催地についての理解と関心を深め新たな問題意識や課題解決に向けて参画意識を涵養する。



《スペシャルトピックディスカッション》

同年代の学生である参加者が、個々の関心に沿った議題を自由に設定し、議論をすること目的としている。また参加者の主体的、自発的な参加により、問題発見能力や議題設定能力を養うばかりではなく、参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想を得ることで、会議をより充実させることも求められる。



《リフレクション》

参加者が一同に集い、3 週間の共同生活や、価値観や思考様式の違いから生まれる悩みなどを自由に話し合う。参加者自身が心を開き、自ら思うことを率直に語り合うことで、参加者間の相互理解一助となることを期待している。また、他者の思いを理解することにより会議の充実や運営の円滑化など会議の成功に向けて努力する姿勢が参加者の中に生まれることを目的としている。



《ファイナルフォーラム》

最終開催地におけるファイナルフォーラムでは、3 週間の総括を行う。現代社会が抱えるさまざまな問題を提起した7つの分科会における議論の概容と活動内容を発表することにより、第 66 回日米学生会議の成果として社会に発信する。



Conference Sites Des Moines



第 66 回日米学生会議の幕開けとなったアイオワ州デモイン。地方都市でありながら、政治や文化、農業において大きな存在感を持つこの地で、代表団が何を学ぶことができるのかを念頭に置いてサイトの準備と運営に取り組んできた。

私たちが滞在した Grinnell college は自然に溢れる美しいキャンパスで、関東や関西などの都市部出身の多い日本側代表団は会議の始まりをこの素晴らしいキャンパスで始めることに喜びを感じていた。同時に、ここアイオワでは、私たちが普段の大学の授業では学ぶことができない知見を、様々な機会を通じて学ぶことができた。

アメリカ原住民の文化や習慣がいまだに残されている Meskwaki Settlement では、実際に原住民の方々と交流を持つ機会に恵まれた。民族博物館を管理する原住民の老人が 200 年近く前の欧州からの侵略に対する怨恨を、まるで昨日のことのように語る姿に多くの学生が衝撃を受けていた。アイオワと聞けば多くのアメリカ人が「広大なとうもろこし畑」を思い浮かべるが、その想像を超える景色を我々は直接目にもすることもできた。視界の端から端まで、地平線の向こう側まで広がっているとうもろこし畑は、アメリカ大規模農業の強さを表していた。農場以外にも、農業に貢献した人々を讃える場である The World Food Prize へ訪問し、また広大な農場を経営する農業従事者や農作物に関する研究をしている教授とのシンポジウムでは、農業技術の革新と農業が持つ可能性も知ることができた。学生の中には、ただ講演者の話を聞くだけでなく、批判的に技術の危険性を主張するものも少なくなかったが、これは学生たちが農業にまつわる問題について真剣に考えていた表れであった。



Conference Sites

San Francisco



様々な文化が交差する移民街、活発な LGBTQ 活動、IT 企業を始めとする多くの起業家。西海岸随一の国際都市であるサンフランシスコを象徴するようなプログラムがこの第二サイトで実現されたように思う。

UC Berkeley においての移民や LGTBQ に関する多様性シンポジウム。代表団各々の得意なことを皆に披露するタレントショー。歴代の参加者を募った日米学生会議 80 周年式典。サンフランシスコの生活を肌で感じるホームステイ。多くの人々の憧れでもある Google の企業見学。日本の文化を体験した Japanese Cultural Night。これらのプログラムの一つ一つを通じて、自身の五感でサンフランシスコの多様性を感じることができた。そして、米国の自由で遊び心溢れる雰囲気や日本との違いに衝撃を受けるも、米国参加者と日本文化を楽しみながら、日米の違いを感じ、日米に通ずるものを発見することができた。

ところが、連日の過密日程により、代表団には疲れも見え始めていた。分科会内の議論を重ねる毎に、問題点が露わになり、コミュニケーションの難しさにも直面した。また分科会以外でも、毎日早朝から夜分遅くまで様々なプログラムが隙間なく詰まっており、体力的にも精神的にも厳しい日々となっていた。サイト担当者としては、参加者が少しでも多くのことを吸収して欲しいとの思いから、一日にいくつものプログラムを盛り込んだ。だが、自分たちの希望の押し付けになっていないかという葛藤、また、ホスト側ではない担当者としてどのようにアメリカ側実行委員を支えようかと悩んだこともあった。そんな苦悩を乗り越え、代表団の楽しそうな姿や喜びの声を聞く度に、サンフランシスコ特有の経験を提供できたと感じている。本サイトでの経験が、一人一人の将来に欠かせないものとなっていることを願う。

第2開催地コーディネーター



Conference Sites New York



第3開催地ニューヨークでは、『平和と将来』を主題にプログラムを構成した。米国で「平和」を考えるにあたって、2001年に起きたアメリカ同時多発テロ事件を避けて通ることは出来ない。代表団一行は、旧世界貿易センタービル跡地に建設された 9/11 Memorial へと足を運び、メモリアルサイト付近にあるミュージアムで事件の悲惨さを学んだ。ミュージアムでは、代表団の学生たちが日米両国の視点で事件当時の様子を語り合い、テロリズムと平和について意見交換をしているシーンも見受けられた。平和を考える上では、そうした「対話」こそが最も大切な手段なのではないかと強く思う。

また、終戦記念日である 8 月 15 日には「原爆」をテーマにした講演を拝聴した。講演では、原爆がもたらした悲惨さを豊富な映像資料を用いて学んだが、米国人学生にとっては、そのような機会は新しく、また貴重であったように思える。講演後には、核兵器問題の現状を捉えた上で、学生内で解決策を議論した。

「将来」を考えるにあたって、多種多様な業界の代表者を集めたパネルディスカッション、および学生と社会人とのネットワーキングからなる「Career Fair」も行った。各業界の最前線で働く社会人の方々との交流は、各人が抱く将来へのキャリアビジョン明確化に寄与したことだろう。

こうしたニューヨークでの経験が、代表団ひとりひとりの平和構築意識へと繋がり、社会人として働く中でも、何らかの形で平和維持・希求に貢献していったら貰えればコーディネーターとしてこの上ない幸せである。



Conference Sites

Washington, D.C.



ワシントン D.C. は意外にも静かな都市であった。第3開催地ニューヨークの活気に慣れていたからか、一層強くそう感じられた。しかし一歩踏み入ると、そこが政治と国際関係が渦巻くアメリカの首都であることをすぐさま実感した。

U.S. Capitol Visitor Center で開かれた日米安全保障に関するパネルでは、まさにアメリカが世界に誇る情報網と戦略的思考を垣間見ることができた。安全保障を保つ上で、日本とアメリカは戦略的な提携関係にあることを確認した。

また日本がアメリカに桜を寄贈したことで、毎年ワシントン D.C. で開かれるようになった桜祭りが象徴するように、日本とアメリカは友好関係にある。日系人のアメリカ兵として太平洋戦争で戦った Terry Shima 氏の講演は日本とアメリカの複雑な歴史を語った。祖国とは敵側の立場で戦ったというご経験も、二国が友好関係にある今だからこそ語り得たことであろう。また、日本人と結婚なさった Bork 氏に招かれて開いた、Bork 邸での立食パーティーも、日本とアメリカの友好関係を願う人々の想いを象徴していた。

最終サイトという性格をもった本サイトは最終発表であるファイナルフォーラムが控えている。約1ヶ月の議論の成果を集約することに参加者は必死になった。発表を終えた参加者は、重荷を下ろしたように表情が晴れ、達成感で溢れているようだった。

最後に次期実行委員を選出し、第67回への襷をつないだ。このようにして今後も日米の友好関係は学生レベルでも繋がれていく。



分科会統括 ～芸術とアイデンティティ～

◆芸術とアイデンティティ分科会の意義

「芸術は人類にとって必要か。」そんな問いに始まり、この分科会は設立された。人間の生命維持活動に必要な不可欠ではないにもかかわらず、なぜ人間は、古来より芸術創作活動を行ってきたのだろうか。軍事力や経済力が国家間のパワーバランスに大きく影響を与える一方で、芸術が持つ文化的な力がもたらす影響度は決して大きいものではない。しかし、それでも人は芸術という文化活動を続ける。だからこそ当分科会は、「芸術」と「人間」の関係性を見つめ直し、芸術の社会的役割とその価値を模索することを意義とした。

◆事前準備活動

1. 春合宿

分科会員が初めて対面した春合宿では、「芸術」という抽象的な言葉の定義に悩まされた。そもそも全員が芸術分野を専門に学んでいる学生ではなかったため、漠然とした芸術というものを、どの切り口から語るか合意形成に努めた。結果的には完全な合意形成には至らなかったが、個々の関心を共有した時に見えてきた議題は、「芸術の社会的役割」であった。そのため、春合宿以降での方向性として、個々の関心分野である伝統芸術の価値、文化外交、平和と芸術、俳句などに関連する組織や知識人への積極的なフィールドトリップを通じて見識を深めつつ、「芸術の社会的役割」を模索していく運びになった。

2. 防衛大学校研修

防衛大学校の学生は、「藤田嗣治（レオナルド・フジタ）」を題材に素晴らしいプレゼンを披露してくれた。藤田嗣治は大正期の画家で、日本で生まれ、画家としての人生はフランスにて過ごした。彼の代表的な作品として戦争画が挙げられるが、彼が芸術として極めたその画が戦争協力だという原因で、日本政府は彼を日本から追放する。失意のもとにフランスで画を書き続ける中で、どうしても日本を忘れられない藤田はこのように述べている。「私が日本を捨てたのではない。日本に捨てられたのだ」「私はフランスに、どこまでも日本人として完成すべく努力したい。私は世界に日本人として生きたいと願う。それはまた、世界人として日本に生きることもなるだろうと思う。」日本人アイデンティティを抱えながら、画という自己表現を通じて自身の想いを訴える。これこそまさに、アイデンティティが芸術に投影されている例であり、芸術の価値を見た気がした。



初めての集合写真を春合宿にて撮影。



議論を交わした防衛大学校生と撮影。



3. フィールドトリップ

《文部科学省国際課課長 今里様》

文部科学省という政府的な立場から、「芸術の社会的役割」や文化芸術保護・促進にどのように国家が関わっているのかをお伺いした。一貫して相互理解のため、そして世界平和のための文化交流を目的とし、活動されてきた姿が印象的だった。

・文化財の保護と活用

文化財の活用は、文化財の可能性を生かす上で有効だが、観光資源としてのみ利用されてしまうことにも問題がある。文化をただ活用し、消費するのではなく、並行して保存を考えなければいけない。

・文学の保護に関する問題

文学の持つ言論、思想の自由を求める性質は時に体制批判の役割も担ってきたため、国の保護の対象になりにくい。

《国際交流基金》

・アートがコミュニティに与える力

日系ブラジル人アーティストTiti Freak氏の東日本大震災後の活動を例に、アートがコミュニティに与える力を学んだ。Titi Freak氏は壁や建物に直接スプレーで描くグラフィックアーティストであるが、宮城県石巻市の仮設住宅にグラフィックアートを描くことによって、仮設住宅に住む人々に1) グラフィックアートを話題にした住民間の「対話」2) 自分の住む場所に対する「誇り」をもたらした。

《浮世絵保存協会》

・伝統文化芸術の技術保護と継承

浮世絵を制作する職人はすでに国内にほとんど存在せず、最後の徒弟制度による最後の彫師である石井さんにお話を伺った。政府だけではなく、日本の社会全体で伝統文化の価値、守る意味を受容し、伝統文化を社会が必要とする体制を作っていかなければならない必要性を強く学んだ。

《日本芸術文化振興会》

・日本の文化活動における経済的背景

日本には豊かな伝統文化が現存しているにもかかわらず、それを保護し継承するための文化予算は低いということを、国家予算書を見ることで目の当たりにした。

・伝統芸術の後継者問題

将来を担う世代に邦楽や芸能を楽しんでもらうためには、芸術教育などの文化活動を促進させるための国からの支援が必要不可欠であると感じた。また、もう一つの問題点は、日本の伝統芸能というのは無形文化財であるがゆえに、技の担い手が残したいという強い思いがない限り、伝承されていかないことであった。

《立教大学現代心理学部映像身体学科 松原大輔さん》

・身体芸術の可能性

松原さんは大学で身体芸術を学び、その傍らサークル活動として病院や学校を訪問し、クラウン（道化師）として人々を楽しませている。クラウンのような身体芸術はお年寄りや子供、障害を持つ方など幅広い層の人々



を楽しませる素地を持っているということを学んだ。複雑な芸術を理解することが難しい人々でも、クラウンのようなわかりやすいエンターテインメントであれば楽しむことが可能であり、より多くの人に楽しみを届けるという意味で身体芸術の可能性を感じた。

《「アートプロジェクト」の著者である東京藝術大学教授 熊倉様》

アートプロジェクトの第一人者である、東京藝術大学音楽環境創造科教授の熊倉純子先生からお話を伺った。アートプロジェクトとはアートやアートに関わるイベントを用いて地域活性化などに貢献することである。

・アートプロジェクトが日本社会において果たす役割と、その可能性

近年アートプロジェクトは地域活性化政策としても活用されており、注目を浴びている。その背景には、表現をしたいアーティストと、地域を盛り上げたい地方自治体との相互利益関係が背景にある。一般的に認識されている美術館的な芸術と異なり、アートプロジェクトにおける芸術はむしろ街の中に存在する。その展示形態は様々であるが、民家を改造してアートにしたり、工場そのものをアートに作り変えたりと、日常にアートを組み込むことができる。この日常とアートという形態が日本人のアートへの関心を掻き立て、相互の距離を縮めるのではないかと思う。

《「紛争と文化外交」の著者である福島様》

・文化外交という平和構築

国際関係論の専門でいらっしゃる福島様には、今回、文化外交を通したアートの意義についてのお話を伺った。対立の壁を越えた人物交流の実現という、アートだからこそ可能になる平和構築という点は特に印象深い話であった。ユーゴスラビアやイスラム地域で民族が入り混じったオーケストラが結成され、「民族」というアイデンティティではなく、「音楽家」というアイデンティティを通して一つの音楽を作り上げることができたのはその一例である。

◆本会議

当初の日本側代表団の狙いとしては、日米両国の芸術作品を紹介しつつ、文化的差異の共有と作品に投影されている両国のアイデンティティを模索することを通じて相互理解を図ることであった。しかし実際には、米国側代表団は日本文化に専門に大学で学んでいる学生であったため、両国を対照化することは果たしえなかった。さらには、日米両国において「芸術」の定義も異なれば、分科会員全員の関心分野もバラバラであったため、第1開催地デモインにおいては、個々の関心の共有と、今後の会議の方向性を決めるのに終始したのであった。

第2開催地サンフランシスコに場所を変えてもなお方向性は収束せず、議論が行き詰まった。ところが、サンフランシスコ・アジア美術館を訪れ、そこで出会ったある絵画をきっかけに議論の方向性は徐々にまとまっていった。絵画は森村泰昌の『肖像（双子）』と題されたポートレートで、私たちがトランスジェンダーあるいは日米両国のジェンダーに関する認識の違いと向き合う契機となった。一見作者の個性に見える作風は、その芸術の背景にある時代的、地理的、文化的要因に大きく左右されているという点を共有できたことは大きな前進であり、芸術が社会を表象するものとして、深く人間の生活と関わっているということが実感でき、その後の議論を進める上での大前提となった。

第3開催地ニューヨークでは、9/11 Memorialで日本から送られた平和を願う千羽鶴や噴水のモニュメント



を見ることで、「芸術」のなす役割について米国側学生と意見を交わした。千羽鶴自体が追悼・平和への願いを象徴的に表していることから、人間が作品を通して感情表現することを再認識し、芸術の持つ力を感じた。また、9/11 Memorial Museumという存在自体が「アイデンティティ」の中で重要なナショナリズムを掻き立てているか否かについても議論を行い、非常に有意義な時間となった。一方で、ファイナルフォーラムへの焦りから、第3開催地で初めて分科会内で意見が対立してしまった。そんな中、NYのハーレム等を中心に暴力と社会、芸術の関係を研究なさっている多摩美大の中村教授からお話を伺う機会に恵まれた。中村教授は沢山のことを教えてくださったが、そもそも日米の違いを発見した後で、その違いにどのように向き合っていくべきなのか、という重要な問いも投げかけてくれた。見落としていた重要課題に気付いた私たちは、それを含めて改めてディスカッションし、またメンバー1人1人を理解しようと努力することで意見の衝突を乗り越えることができた。

第4開催地ワシントンDC、ファイナルフォーラムで行った最終的なトピックとしては、近年のジェンダーに対する考えの変化、日米のジェンダーの違いを探ることで、日米の違いにどのように向き合うかに繋げて考えた。

◆分科会総括

当分科会「芸術とアイデンティティ」は、芸術作品の背景にある文化的アイデンティティやその歴史を考察し、「芸術」と「人間」の関係を再考するとともに、芸術の社会的役割と価値を模索することを目的とした。分科会員は芸術分野を専門に学んでいる訳ではなかったため、事前準備活動としてフィールドトリップを存分に活用し、知見を深めていった。例えば、日本芸術文化振興会では、日本国家の伝統文化・芸術に対する不十分な支援について学び、考えさせられた。たしかに国家間のパワーバランスを考えると、影響力が大きいのは軍勢力や経済力であり、芸術のような文化的力が直接的に他国へ影響を及ぼすということは多くはない。しかしそれは、文化芸術が社会的価値を持っていないという訳ではなかった。むしろ、フィールドトリップと議論を繰り返す中で感じたのは、芸術には十分に価値があり、だからこそ古来より人類は芸術創作活動を行ってきたのだと。

本会議では、芸術作品を通して日米における文化的嗜好を知ると共に、アイデンティティが芸術作品に与える影響について、美術館で作品を取り上げながら話し合った。例えば、西洋人画家マネによって描かれた絵画と、その絵画をジェンダーのメッセージを添えてリメイクした日本人画家の話を中心に取り上げ、絵画に投影されているアジアと欧米のアイデンティティを考察した。

本会議中には、分科会員同士の議論の衝突や人間性の対立等も生じた。しかし結果的には、全員で対話の機会を設けることにより障害を乗り越え、相互理解を深めることができたと思う。

また、抽象的な議題に対して、分科会員は知識吸収（インプット）と議論（アウトプット）を繰り返すことで自分たちなりの考えを深めることができたように思える。同時に、一般的に学生が議論することのない「芸術」という議題を、日米両国の学生が真剣に議論したことには大変な意義があった。分科会コーディネーターとしての願いは、今回の学びをただ経験として消費するのではなく、会議が終ってこれから「個」として活動していく中でも、その経験の省察を続け、出来得るならば両国の文化芸術に携わるプラスのアクションにまで結びつけてほしい。

最後になりますが、当分科会にご協力頂きました多くの皆様に深く感謝を申し上げ、分科会総括とさせていただきます。



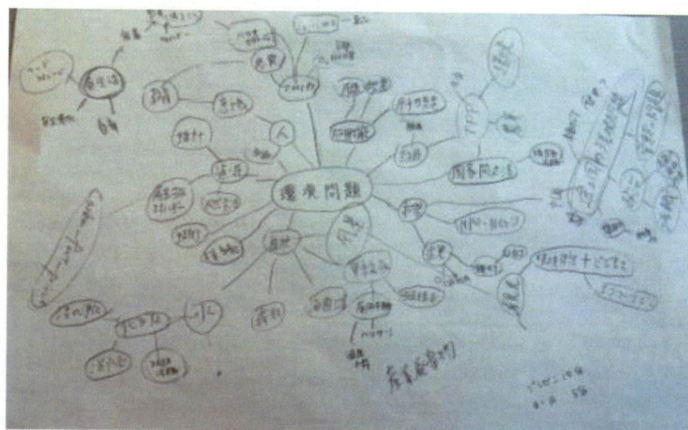
分科会統括 ～環境問題における国家、企業、市民の役割～

◆はじめに

環境問題を扱う分科会は、日米学生会議の長い歴史を見てもほぼ毎年設置されている。それ程、環境問題は私たちにとって身近な問題であると言える。第66回日米学生会議に環境問題を扱う分科会を設置することが決定した当初から、日米の大学生が毎年環境問題について議論を交わしていれば、その内容はありふれたものになってしまうであろうことは安易に予測出来た。そこで今年度の会議では、分科会名を「環境問題における国家、企業、市民の役割」とし、当分科会所属の参加者には、環境問題に関する議論で偏りがちな国家単位での環境問題への取り組みに限らず、各企業、市民一人ひとりが其々の立場で環境問題を向き合い、其々の場所で何が出来るのか、何をすべきなのかに焦点を当てて議論することを期待した。

◆春合宿

5月に開催された春合宿で開始された分科会活動は、メンバー一人ひとりの興味関心を「環境問題」を中心としたマインドマップに書き記すことに始まった。そのマインドマップから、メンバー全員に環境問題に関する知識が不足している事が解り、マインドマップを基に議論を始めても環境問題から外れ、発展途上国問題に関する議論ばかりが発展してしまう側面が見られた。同時に、日本側メンバーの英語力の不足も、否定出来ない事実であった。そこで、春合宿最後の分科会討論で、事前準備の第一段階として、分科会メンバー一人ひとりが「地球温暖化」「東日本大震災による福島第一原子力発電所の事故」「環境汚染による公害病」等とトピックを決め、知名度の高い環境問題に関して調査を行い各自の意見をまとめる、という方針を定めた。



「環境問題」を中心に記したマインドマップ

◆環境×英語勉強会

春合宿での決定を基に、設定したトピックに関して、各自約半月間調査を行い、5月下旬から6月上旬にかけて、其々の調査結果を英語で発表し議論する「環境×英語勉強会」を2度程実施した。ここでは、不足していた環境問題に関する知識を補うと共に、勉強会の全てを英語で行い、本会議の「英語漬け」の環境に慣れることを目指した。各自が行った調査研究により、環境問題には未だに真相が



見えない部分が多いこと、環境問題は国家間の問題ではなく、人々が自ら進んで環境問題に目を向け、改善に向けて取り組まなければならないこと等、一見当たり前のことでありながら実際には理解されていない、実行に移されていないことが数多くあることを再認識することとなった。

◆防衛大学校研修

6月に開催された防衛大学校研修では、防衛大学校の学生5名と環境問題に関して議論を交わした。初めに、分科会メンバーがそれまでの議論内容や調査結果を発表したが、防衛大学校の学生にとっても、調査前の参加者同様、環境問題は身近なでありながらも普段大きな関心を寄せるものではなかったようだった。一方で、環境問題に関する専門知識が少なかったことから、防衛大学校の学生は「一般市民」の視点に立ち、環境問題は身近な問題であることは解るが実情があまり伝わってこないのが現実味が薄い、環境保護を組み込んだビジネスを行えば効果が出るのでは、等の意見が出た。

専門的な知識を深めていた分科会メンバーにとっては、市民の立場からの意見は非常に新鮮であったと同時に、初心に戻るきっかけとなった。

◆その他の事前活動

分科会独自の事前活動として、当分科会では身近な場所で環境問題に配慮した研究をしている大学2ヶ所をフィールドトリップとして訪問した。6月下旬には、分科会メンバーの一人が所属する千葉大学の植物工場を訪問した。環境問題に配慮しながら味も良い野菜等を育てる日本の技術をアメリカ側にも伝えるべく、メンバーは熱心に見学していた。また7月下旬には、環境問題と経済を専門として研究されている立教大学の大山利男先生にお話を伺い、市民として学生であるメンバーに出来る事は何か、等の貴重なご意見を頂いた。実際に目で見て耳で聞くことにより、日本の環境問題に対する取り組みや研究についての知識も深めていった。

しかしながら、分科会メンバーの意見や価値観の相違、定例分科会ミーティングの必要性を感じない、英語力不足に関しても特に不安視はしていない、という一部の参加者の意見から、他の分科会や例年の日米学生会議で見られるような活発な事前準備活動は当分科会では見られなかった。

◆RT ペーパー

毎年日米の参加者全員が其々の分科会に関する興味関心や各自の主張、及び本会議の分科会活動において議論したい議題等について書く「RT ペーパー」と呼ばれる論文では、当分科会では「環境問題と地域発展」、「水俣病の分析」、「原子力」、「福島原発事故後のエネルギー問題」、「水問題」等に関する論文が提出された。これらのテーマを基に、本会議の分科会活動が進められることとなった。英語での論文の執筆は日本側参加者にとっては珍しい経験であり、苦勞する面も多々見られたが、修正を重ねた結果、比較的完成度の高い論文を完成させることが出来た。

◆直前合宿

8月上旬、渡米直前に開催された直前合宿では、其々の調査結果を踏まえて、日本側参加者間で本会議では「環境教育」に焦点を当てて議論したいとの見解で合意した。分科会発表では、それまで各自で調べた調査結果、RT ペーパーの内容、直前合宿で合意した環境教育に焦点を当てて議論していき



たい旨を英語で発表した。発表自体は英語でもスムーズに行う事が出来、参加者の自信に繋がったが、質疑応答の際は調査の成果を発揮する事が難しく、環境問題に対する理解の欠如や英語力不足が浮き彫りとなり、本会議に向けて新たな課題発見の場となった。

◆本会議

第1開催地アイオワで米国側と合流した後は、当分科会所属の米国側参加者が全員日本語に堪能であったことから、日本側参加者の英語力不足に配慮し、日米学生会議としては非常に珍しく議論の大部分が日本語で行われた。その結果、日米学生会議で例年見られる、日本側参加者の「もっと言いたいことがあるのに英語だと上手く伝えられない」という言語の壁を原因とする葛藤は、当分科会では殆ど見られなかった。

本会議における分科会活動では、各自のRTペーパーを読み合うことから始まった。その後はお互いの関心のある分野について議論を行ったが、特に東日本大震災の津波による被災地の環境問題や福島第一原子力発電所の事故による放射能汚染の問題に関しては米国側参加者の関心も強く、「福島産の食物は本当に安全なのか」「日本は放射能汚染されていて危険だから行くなと言う人もいるが、日本人は日本で生活していてどうなのか」、等という質問が飛んだ。日本側参加者からは、「放射能汚染と言っても、体内に吸収される放射線量はX線やCT検査で受けるものと変わらない」という意見が出る等、白熱した議論が展開された。

本会議中ほぼ毎日設けられていた分科会の時間内の議論に留まらず、当分科会の参加者達は本会議中に訪問した様々な場所で環境問題に関係するものを見つけては記録するなど、積極的に活動していた。第一開催地アイオワで Meskwaki Settlement を訪問した際は、農園を真剣に見学し、現地の方々に環境問題に関する意見を積極的に聴き、また World Food Prize を訪問した際や農業フォーラムにおけるパネルディスカッションの際にも積極的に手を挙げ質問する等、機会を逃さず有権者の意見を記録していた。

参加者は、本会議前半から日程に含まれていない時間にもミーティングを行い、熱心に議論をしていた。本会議の集大成となるファイナルフォーラムを「学生としての意見を発信するチャンス」と考え、人々の心に残る発表を行うべく、第1開催地滞在中から準備を開始していた。当初は、本会議中に訪問する様々な場所で人々に環境問題への関心に関するインタビューを行い、その映像を組み込もうとする等、分科会を単なる「環境問題に関心のある学生の集まり」で終わらせないよう、日々努力していた。第2開催地サンフランシスコで開催された日米学生会議 OBOG との分科会討論では、学生当時環境問題に関する分科会参加者として議論した経験を持つ OBOG と出会い、参加者は「学生として」の環境問題に対する視点を示し、OBOG からは「社会人として」「大人として」の視点を教わり、より広い視点から議論を深めるきっかけとなった。

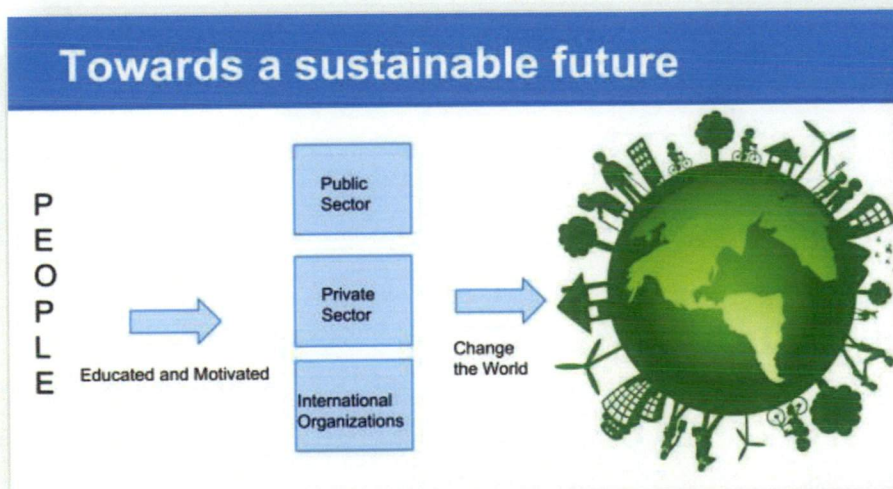
第3開催地ニューヨークでは、それまでの議論や有識者との交流を通じて得た知識やそれに対する意見を踏まえ、毎晩深夜までファイナルフォーラムでの発表の構造を練った。最終開催地ワシントンDCに入った翌日に行われたファイナルフォーラムのリハーサルでは比較的完成度の高い発表を行ったが、分科会内では「退屈だった」との意見で合意し、本番前日に構造を練り直すという大きな挑戦に出た。十分という限られた時間の中で三週間の議論の成果を示し、自分達が出した結論を提案することに、参加者はただ必死だった。



◆ファイナルフォーラム

ファイナルフォーラムでは、日本側が直前合宿で焦点を当てて議論したいと合意した「環境教育」に関する提言を行った。初めに、其々の環境問題に関する興味関心について触れ、ロードアイランド州における環境問題への取り組み、日本側参加者が事前活動で訪問した千葉大学植物工場における環境を保護しながら野菜等を栽培するシステムを紹介する等、日米両国の現状をケーススタディとして示し、その後環境問題一つひとつを改善する手段として、「環境教育の充実の必要性」を主張した。

環境教育を充実させる手段として、分科会で構想を練った児童生徒の成長段階に合わせた二つの環境教育プログラムを提案した。一つ目は、小学校中学年の子どもを対象とした野外教育プログラムで、自然環境保護に関する知識理解を育む事を目的としていた。二つ目は、学生が集い環境問題について議論し、会議後も其々の場所で活動が続けられるようにするという学生環境会議であった。最後に、アジア・ユースリーダーズ、International Student Conference on Environment and Sustainability (ISCES)、キッズ ISO プログラム、全国大学生環境活動コンテスト(ecocon)等、現存する環境教育プログラムやコンテスト等を紹介し、環境教育の重要性を訴えた。ファイナルフォーラムでは日本側参加者も緊張しながらも英語でプレゼンテーションを行い、質疑応答にも英語で対応することが出来た。



◆総括

当分科会が発足した当初は、参加者の知識や英語力の向上を目指し、様々な活動を提案した。しかしながら、参加者の希望をからそれらの殆どを実現できないまま本会議を迎えることになったことは後悔が残る。しかし、三週間の本会議を通して、当初は分科会活動をあまり積極的に行わなかった日本側参加者も、真剣に議論する姿が見られた。英語力を向上させ、本会議では英語で議論出来るようにするという当初の目標は達成されなかったが、この第 66 回日米学生会議が分科会メンバー全員にとって成長の機会となっていれば幸いである。

最後に、当分科会の活動においてご協力頂いた全ての方に御礼申し上げ、分科会総括と致します。

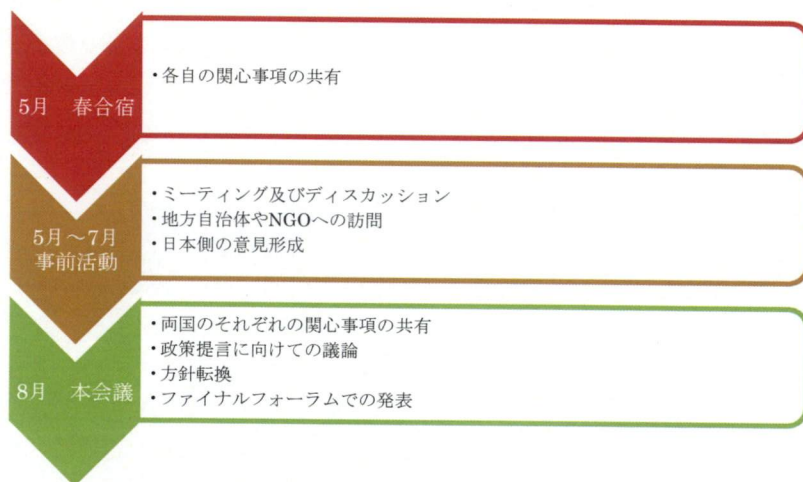


分科会統括 ～移民の功罪と展望～

◆移民の功罪と展望分科会の意義

移民の功罪と展望分科会（以下、移民 RT）は、「移民」という側面から物事を捉えることで、「異なる文化を有する人々が共生するとは」、「人の移動が規制されるのは何故か」等といった根本的な問いに日米両学生に自由に議論して欲しいという願いから発足した。移民 RT の活動に関して、主に春合宿、事前活動、本会議活動の 3 つの時期に分けて以下述べる。

◆移民 RT 活動の流れ



◆春合宿（5 月）

事前に、各メンバーには移民に関連する話題に関して現時点で自身の興味のある事項を調べ、春合宿において持ち寄る形にした。4 名の持ち寄った話題を簡単に述べると以下ようになった。

①移民の教育に関して。

自身の小学校で、国籍の異なる友人との交流が契機となった。

②移民を国際協力の一部と捉え、日本への受け入れを行うことは可能か。

国際協力に関心があり、さらに祖父が米国にて移民として居住していたことが契機となった。

③移民の人権保護に関して。

自身の専攻が人権であること、そして難民の保護に関して興味があることが契機となった。

④人が国籍という理由だけで自身の権利が制限されるのは何故か。

自身がハーフであることが契機となった。

関心事項がそれぞれ異なるだけに、当初は困惑した表情を皆が示していた。しかし次第に各メンバーがそれぞれの意見を出し合い、最終的には 8 月の本会議までの目標を定め、その目標を春合宿の最終日に全体へと発表することとなった。春合宿時点での目標は以下のようであった。

命題：日本において、移民を受け入れるべきか否か。

最終目標：日本政府に対して、政策提言を行う。



要議論事項：

- ①移民への教育に関してはどのようなことが必要なのか。
- ②移民の人権を保護するためには。
- ③国際協力の一環としての人材育成という観点から受け入れることは可能か。
- ④そもそも国籍で人を判断することは許されるのか。

以上のような形で、事前活動を行うという方針に決定し、春合宿は終了した。

事前活動（5月～7月）

まずは、各自の移民に関する知識不足を補うため、日本の出入国管理制度や移民を受け入れている国の歴史などを調べることから始まった。その後、移民の定義とは何か、日本と移民を受け入れている国との違いは何かなどを調査した。結果として以下のようなことを問題視するようになった。

- ①現時点で、国籍の異なる人を受け入れる条件として、学歴や語学力、年収を重視している。つまり、日本に経済的に有益とみなすことのできる人材のみ受け入れようとしているのではないか。
- ②仮に上記の条件を満たしていても、ビザを取得する手続きが非常に複雑であり、移民へのサポートがなされていない。
- ③仮に日本に入国したとしても、安価な労働力として搾取される場合がある。

以上のような問題点をあげた上で、移民 RT としては以下のような根本的な問いに直面した。

- ①そもそも移民を受け入れて、多文化共生を行うとはどういうことなのか、多文化共生とは何か。
- ②同化政策や統合政策といったものは多文化共生を否定しているのではないか。
- ③異なる文化を尊重し、同じ地域で共生していくためにはどうすべきかを議論した。

結論：米国における教育制度や法整備、国籍の付与の方法などを参考にできるのかと考えた。そこでこの点に関して、本会議において議論を深め、最終的には米国側の意見をとりいれた政策提言を実現させるという方針をとった。本会議までは、各自春合宿で関心のあった分野を興味分野に関して知識を深め、地方自治体や NGO を訪問して現場の声を聞き、本会議に備えた。

◆フィールドトリップ

・国家公務員 新井田理恵さん

国家公務員という立場から日本の出入国管理に携わる新井田さんの率直な意見を伺った。そこで、日本を訪問する人々に求めるものと、それまで移民 RT として議論してきた移民へのサポートとの違いを実感した。民官との間で、やはり差があるのかということを考えるきっかけとなった。



新井田さんとの対談の様子



◆本会議（8月）

最初の開催地では、初めて米国側と顔を合わせるということで、まずは各々の関心分野を共有した。米国側参加者4名が持ち寄った関心事項は以下のようであった。

①日本の移民問題に関して。

日本は移民を受け入れるべきだという立場の基に、高齢化の進む日本が移民を受け入れる上で、生じる可能性のある問題に関して。

②ブラジルへの日本人移民に関して。

2016年に開催されるリオデジャネイロオリンピックに際して、ブラジルは移民を受け入れたがっている。その上で日本は移民を送り出すべきかに関して。

③日本への留学生が抱える問題について。

日本に留学した多くの学生がコミュニケーションや文化の違いによって苦労している。日本の大学制度の見直しに関して。

④日本の移民受入れに際する注意に関して。

移民を受け入れれば、犯罪や文化的摩擦が生じる。その対処法に関して。

事前活動において、日本側が準備してきた内容に共通する点もあれば、大きく異なる部分も生じた。そのことが一因となり、日本側と米国側との間に方向性の違いが見られるようになった。

日本側の方針：

政策提言を目標としていることもあり、まずは具体的にいつ、何を話すかの計画を立てたい。そして政策を考える前に移民の定義など抽象的な事項に関して議論したい。

米国側の方針：

抽象的な議論を試みるよりも、米国における不法移民の問題といったような具体的な事例を全員で考え、議論したい。

日本側と米国側の性格の違いが明確に表れていたように思う。しかし、誰も両者の主張の差異を埋めようとするのができなかった。会議中盤に第三者に移民RTとしての目標が明確でないという指摘を受けた。そこで、それまで政策提言に固執していたことに気が付いた。その後の意見共有の結果、日米学生会議の移民RTとして学生にしかできない議論をしたいという結論に至った。そこで各自が議論したいことを持ち寄り、そのことについて議論することとした。そしてそこからの気づきを最終的に発表することとなった。

各自議論したいことを整理し、議論することとなった。各自議論したい議題は以下のようであった。

①Globalization vs. Segregation

②Immigration and Identity

③Can immigration be a tool of international cooperation?

④Is it good to have only one official language or several?

⑤Education and immigration

⑥Should governments put age limits of any kind on people immigrating in their countries?



⑦ Should undocumented immigrants be able to receive permanent residency?

⑧ Should the government grant permanent residents any rights to vote?

◆議論内容例:

④ Is it good to have only one official language or several?

一つの公用語支持派の意見

- ・より強固な国家アイデンティティの形成
- ・皆が共有し合える言語の必要性
- ・皆が公共サービスの利用が可能
- ・政府の役割に言語の保護は含まれない

複数の言語支持派の意見

- ・マイノリティに対しての公平性の確保
- ・マイノリティを認める手段
- ・言語に関係なく、グローバル社会には適応できる

⑦ Should undocumented immigrants be able to receive permanent residency?

賛成派の意見

- ・社会への十分な貢献
- ・一定時間の労働
- ・義務教育の終了

以上3つの条件を課せば賛成

反対派の意見

- ・不法滞在増加の危険性
- ・正式な手続きを踏まない移民をより受け入れることとなる可能性

分科会総括

移民 RT では、当初目標としていた政策提言を達成することはできなかった。最終的にファイナルフォーラムで発表した内容も、より早く議論自体に取り掛かっていればより具体的に議論が可能となり、より独自性のあるものとなったかもしれない。議論の内容のは、日米学生会議において重要なものである。しかし同様に、ファイナルフォーラムまでに全員で話し合い、それぞれが葛藤しながらも方向性を決め、それに向かって取り組むという過程も当会議で得られる一つの重要な経験であると感じている。

最初には予期できなかったようなすれ違いや衝突を経て、初めて気づくこともある。日米の両学生が今問題と捉える議題に関して限られた時間でも議論する。時には答えのない問いにも取り組む。移民 RT にとっては、そこに意義があると最終的に考え活動を行った。それが正しかったのかは分からない。しかし、移民 RT での経験がそれぞれにとって大きな意味を持つものとなったと確信している。移民 RT のそれぞれが、ここでの経験を糧に今後の日米間の平和を担う一員となることを願っている。

最後となりますが、当分科会にご協力賜りました全ての方々に感謝申し上げます。誠にありがとうございました。



分科会統括 ～現代における歴史教育とその社会的影響～

◆分科会の意義

国民国家の成立以降、歴史教育は国家に愛国心を持った国民を創るために重要な役割を果たしてきた。しかし、歴史認識の差異は国家間、民族間対立を生み出す原因にもなっている。当分科会では、現代の歴史教育とそれによって引き起こされた問題を考察し、国家や社会、市民にとって理想の歴史教育をどのように実現するべきかを考察する。

◆事前活動

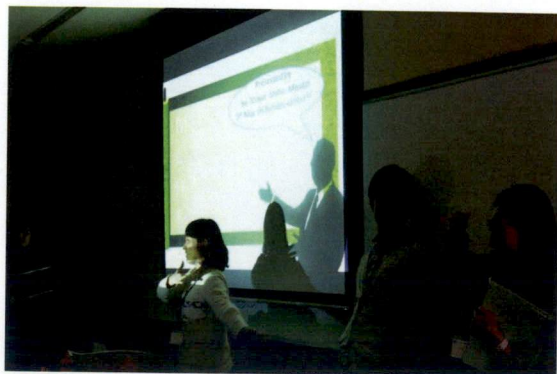
分科会の日本側代表団が最初に集まった春合宿では、まず歴史教育にどういった考えや問題意識を持っているのかについての共有を行った。メンバーの多くが国家やメディア、インターネットなどの外的要因によって歴史教育が影響をうけることの危険性を述べていた。また日本における歴史教育が他国の歴史教育と比べて、どういった特徴をもっているのか、海外での歴史教育の影響についての議論も盛んに行われた。ドイツでの戦後歴史教育やルワンダのジェノサイド後の教育、ロシアにおける歴史教育の政治利用、アメリカによる日本教育への影響などを各個人の分科会ペーパーにて調査、執筆することが決まった。

6月に行われた防衛大学校の自衛官幹部候補生との議論では、現在の日本の歴史教育の利点や問題点について積極的な議論を行った。防衛大学生の中には、歴史教育は自国の愛国心強化の為にあるという考えを持った学生が多くいた一方で、海外留学経験のある一部の学生が、歴史教育においては国際協調に重きをおくべきという考えを持っていた。愛国心育成のためには現在の“自虐史観”的な教育を変え、戦争中の日本政府や日本軍の功績を描写すべきだといった意見と周辺諸国との協調のために過去の戦争犯罪を教えるべきだといった意見の衝突があった。

春合宿や防衛大学校での議論を経て、メンバーは歴史教育の目的はどうあるべきなのかについての視点を得た。7月末の直前合宿では、3ヶ月の成果と本会議での目標を日本側代表団に向けて発表し渡米に向けた最後の準備を行った。



防衛大学生と



春合宿でのプレゼンテーション

◆会議活動

1. デモイン

第1開催地、デモインではまず事前準備期間に調査していた各自の歴史教育に関する問題についての共有と議論を行った。日本側はメディアの影響、ロシアにおける歴史教育の政治的利用、ドイツの戦後教育、ルワンダにおける歴史教育と平和構築について発表し、アメリカ側は、現代の日本の歴史教育の問題点と改善方法について、アメリカの歴史教育の偏り、刀と日本人のイデオロギーの関係、歴史教育の政府による恣意的な利用の8つの論点を議論した。幸いなことに、当分科会のメンバーは日本人、日本人帰国子女、日本と外国人のハーフ、中国人、韓国人、アメリカ人と多様性に恵まれ、議論では多くの視点や各出身国の国民の考え方を共に学びながら進むことができた。また事前準備で調査した8つのテーマはそれぞれ異なっていたものの、メンバー全員が日米を含めたアジア太平洋地域の歴史教育の重要性と問題意識を持っていることがわかった。

デモインではアメリカ原住民が生活するメスクワキセトルメントとメスクワキ族の民族博物館に訪れ、原住民の老人から講義を受ける機会があった。彼は「我々は200年前にヨーロッパ人に迫害されたことをいまだに恨んでいる。彼らは自分の国に帰るべきだ。」と感情的に述べていた。過去の戦争や現在の対立を乗り越えるために、歴史教育をどう改善していくかを考えていたメンバーにとって、彼の感情的な主張を聞いて大きな衝撃を受けていたと同時に、彼のように民族による教育を強く受ける教育の危険性を再認識する機会となった。



デモインでの議論



原住民の方による講演

2. サンフランシスコおよびニューヨーク

第2開催地サンフランシスコでは1つのグループとして何を議論し、ファイナルフォーラムにどんな発表をするのかを考え始めた。まず我々は分科会名である、“Modern Consequences of Historical Education”の“Modern Consequences”とは何のことを示唆しているのかを考えていった。従軍慰安婦をめぐる問題や靖国神社参拝の問題、日本の教科書の記述に関する問題など様々な論題が提案されたが、メンバーが特に懸念していたのが日本の若者の右翼化である。「ネトウヨ」と呼ばれるインターネットを使用する排外主義者や「在特会」のようにヘイトスピーチを市街で行う排外主義的な市民団体の活動は、一般の市民にも影響を与えうる重要な問題だと認識していた。そして我々は、



こういった排外主義活動が日本で活発になっている理由を議論し始めた。日本の豊かな経済力に裏付けされた高い国際地位が、中国の拡大によって相対的に低下した結果、国民が自信を喪失し経済にかわって極端な政治活動に引きつけられたのではないかといった意見や、国民の政治参加の低下の結果として合理的で教養の高い国民の政治参加の低下が、排外主義者の声を大きくしているのではないかなどの意見がでたが、グループとしてのコンサセンサスにたどり着くことはできなかった。

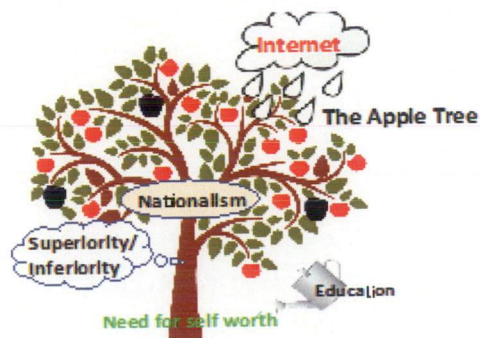
第3開催地、ニューヨークではサンフランシスコで決定した「日本の若者間の排外主義活動の増加」についての原因と解決策を中心に話し合った。我々はまず排外主義活動の原因について第2サイトから継続して話し合いを行った。

議論の中で原因を国民の自信の喪失に絞り、なぜ自信の喪失が排外主義活動につながるのかを掘り下げていった。その中で、現在の日本の歴史教育の問題点や受動的な学生の学力低下などが指摘された。またナショナリズムが影響を受ける過程をわかりやすくするために、こういったモデルを使用するかなど実際の発表に向けた準備も着々と進んでいった。

3. ワシントン D.C.およびファイナルフォーラム

ワシントン D.C.で行われたファイナルフォーラムでは分科会として辿り着いた結論を共有することができた。現代における影響の1つである、「21世紀の日本の排外主義的な活動」がなぜ拡大しているのかを、「りんごの木」モデルを使って説明した。ナショナリズム(林檎の木)は学校教育(じょうろの水)によって育てられるが、学校だけでなくインターネット(雨)などからも影響を受けていく。このナショナリズムは上手く育つ(赤い林檎)になる時がほとんどだが、まれに外部から影響を受けた偏ったナショナリズム(黒い毒林檎)が生まれる場合もある。

偏ったナショナリズムが生まれる原因として我々は、歴史教科書の記述のバランス、インターネットの影響、国民が保持する相対的優越感の3つを発表した。現行の日本の教科書では、原爆投下などの日本の被害や戦争の悲惨さに重点が置かれすぎており、国民の歴史問題に関する知識の欠如を引き起こしている。また、2ちゃんねるをはじめとしたインターネットの発達、情報発信のハードルを大きく引き下げ誤った情報の拡散の原因となっている。そして、他者より優れた人間でありたいといった人間の本質が、経済不況の中で苦しむ日本人に右翼活動への活動につながっていると考えた。この3つの問題の解決策として、1つ目に歴史教育での記述を被害中心のものから、戦争犯罪に関する記述を増やすことや異なる立場の視点や意見を教科書に載せること、2つ目に国民により歴史問題に対する能動的な学習を促すこと、3つ目に国際交流を増やす交換留学を推進すること、4つ目に人間の本質を変えることは不可能だが、他者との“差異”にのみ注目することを止めることが必要であると結論づけた。



Modern Consequences

•Ultra-nationalist Movement in Japan (21c~)

Right-wing, Exclusionism, Historical Revisionism

•1, The Internet forum: "2Channel"

•2, Demonstration on the street

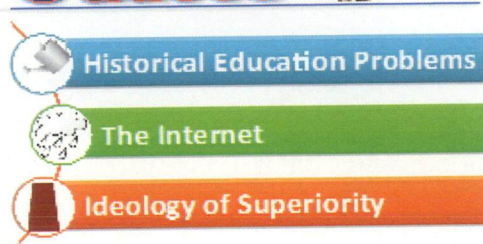
Ex) Anl -Korean Hate Speech by "Zaitokukai"



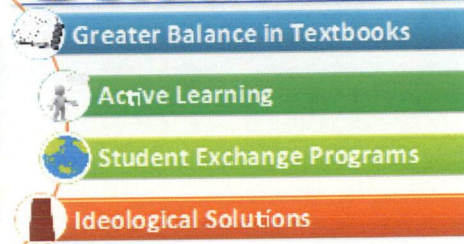
•Not only the youth but the elders also support it

2014 Tokyo International University

Causes



Solutions



ファイナルフォーラムで用いたプレゼンテーションスライド

◆終わりに

冷戦後の世界では国家間貿易が大幅に拡大し、情報技術の革新は物・サービスの移動の費用を低下させ、他国民との交流を拡大した。この地域主義が高まっているグローバル世界の中で日本、韓国、中国などの北東アジアの国は、20世紀の世界大戦の負の遺産に苦しめられている。多くの学者やビジネスマン、政治家が歴史問題を解決しようと努力してきたが、残念ながら未だに解決には至っていない。このような状況の中に発足した、「現代における歴史教育とその社会的影響」分科会では、社会的な立場に縛られない学生として難しい問題に真っ向から立ち向かうことができた。発表でも述べた日本の学生の一部が右翼化している一方で、我々のように心から現在の状況に危機感を抱き、解決したいと本気で思っている学生もいるのである。我々が辿った議論はもしかすると違う学生団体や大人による会議によって行われたものと同じかもしれないが、この分科会に参加した10人の日米学生会議の学生が議論で得た、「衝突と克服」は将来、歴史問題のみならず国家間、地球規模の問題を解決する際に必要な経験だったと信じている。日米学生会議の分科会活動としては夏の活動で終わりだが、国籍、人種、文化の差異や多くの“違い”を乗り越えて、1ヶ月間議論したメンバーが今後、日米を超えた地球社会に貢献して行くことを願っている。

最後になりましたが分科会活動にご協力、ご指導して下さった皆様に心からの感謝を申し上げ、分科会総括とさせていただきます、本当にありがとうございました。



分科会統括 ～正義と道徳～

◆はじめに

当分科会は、第66回日米学生会議におけるワイルドカードのような存在である。他の分科会と異なり、これと言った明確な議題が予め設けられてない。そのため、参加者の興味関心を全面的に反映することができる。しかし、広範囲に渡って論題を扱えるだけに、一人一人には幅広い教養と積極的に学ぶ姿勢が求められた。各事象の本質を見抜く力が不可欠であり、大変難易度の高い分科会であったように振り返る。参考までに、今回の代表団を公募した際に用いられた当分科会の説明文を紹介する。

人々の価値観は地域や文化、宗教など様々な要因によって形成され、それぞれの価値観により多様な正義が存在する。1994年にルワンダで発生した大量虐殺が、深刻な人権侵害であるとの認識は各国一致していた。しかし人道的介入とは言え、軍事力を用いて解決することの是非については見解が分かれた。1人の生命を犠牲にしても、多数の命が助かれれば、その殺人は正当化されるのか。海難事故によって食料を長らく絶たれた4人は、その1人を殺害し遺体を食べ、3人が生き延びた。そのまま4人が餓死するより、3人が生き残ったことを評価する正義がある一方で、その行為を批判する正義もある。同じ事象でも、価値観が異なれば正義も異なる。これに対して、道徳は善悪を判断する規範として、誰もが共有できる普遍的な価値観たり得るのか。当分科会では、価値観を形成する諸要因を考察しながら、果たして相異なる正義が共存できるのか、道徳は普遍的に共有できるのか模索する。



正義と道徳分科会の日米代表メンバー、別れの前に

◆事前活動

当分科会は、日米学生会議の多様性を体現する存在である。秋田、京都、埼玉、東京、富山、日本全国津々浦々の大学生で構成されていたため、物理的な距離が障壁となった。実際に対面した上で見聞を深めることが困難であったため、スカイプ上での会議を隔週で行うこととした。各会議には担当者を一人設ける形式を取り、その担当者の興味関心に則って議論を重ねるよう試みた。具体的には、担当者が事前に参考資料や基本情報を英語で発表し、それを動画形式で全体に共有することとした。英語の予習学習を、日本での準備期間中から意識した結果である。



四名の構成員がいれば、四つの興味関心がある。ビジネスにおける公正な精神の存在価値、LGBTなどのマイノリティと差別、世界平和と国家の役割、生命倫理と技術進歩、多種多様な分野について議論を重ねた。具体的な議論の内容は割愛するが、それぞれのテーマにおいて日本側代表団として総意を得ることは少なかった。例えば国籍は同じであれ、育った環境や受けた教育が異なる以上、価値観が多様化することは当然である。このようにして、本会議前に日本側の多彩さに気づけたことは、米国でさらなる多様性を受容する上で貴重な発見であった。

事前活動の中でも、分科会の構成員が一堂に会することのできた春合宿と直前合宿を特に取り上げたい。春合宿においては『正義』と『道徳』の二つの抽象的な言葉の定義を議論した。言葉の意味が各自によって異なっては、有意義な話し合いができないと考えたからである。結論から言うと、色々な意見が出た。正義は個人の内なる価値基準であり、道徳は大多数が合意した善悪の軸だという説。正義は社会的に正しいとされている概念であり、道徳は理想状態だという説。一人一人の説明からは各自の文化的背景が垣間見え、大変興味深い時間を過ごすことができた。しかし、それと同時に結論のない議論の孕む危険性と焦りも認識した。直前合宿では本会議に向けて効率よく生産性の高い議論をする方法を模索した。本会議のファイナルフォーラムという発表の場に照準を合わせ、計画的に進めるためには抽象的な議題を避け、実存している社会問題を捉えようと決めた。死刑制度、銃社会、集団的自衛権など、我々の生命にも関わり得る議題を念頭に置き、私たちは渡米した。

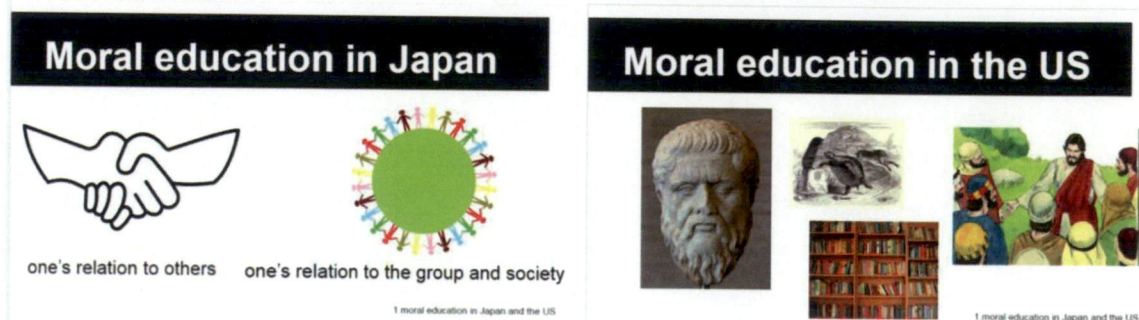
◆本会議活動

第1開催地であるデモインで、初めて直接顔を合わせた日米の「正義と道徳」分科会メンバー。ぎこちなさの残る中、簡単な自己紹介を済ませた後に興味分野の共有をした。日本側と同様に、米国側も関心のある範囲は十人十色だ。男女平等と女性の権利、極限状況における人間の行動学、日本国憲法第九条、同性婚における日米比較など、どれも知的好奇心を刺激する。しかし、この多様性が裏目に出てしまい議題が決まらない。興味分野が錯綜し、足踏み状態の私たちは死刑制度の是非について話し合うこととした。どちらの国にも死刑制度は存在し、その是非が常に問われているからである。第一開催地デモインは、二項対立を見つけ出すことの難しさを痛感した。物事の本質への長い道のりを痛感し、私たちは第2開催地であるサンフランシスコへと向かった。

第2開催地では、公への発表を意識した上で計画的に進めることを考えた。その中で、一つのテーマに絞り一貫性を持たせることが重要ではないか、との意見が出た。それまでは毎日異なるテーマを設定し議論していたため、新鮮な視点であった。結果的に、当分科会は日米の道徳教育を分析することとした。環境によって形は異なれど、人間の成長過程で少なからず触れる道徳教育。それが如何に私たちに影響を与え、社会を形成しているのかを模索した。教育は人格形成の根幹を担っており、それを掘り下げることは人間の本質に近づくことだと信じて。そうすることで、各自の興味分野にも寄与できると考えたからである。全員が納得できる道徳教育という大テーマに出会い、私たちは第2開催地サンフランシスコを後にした。



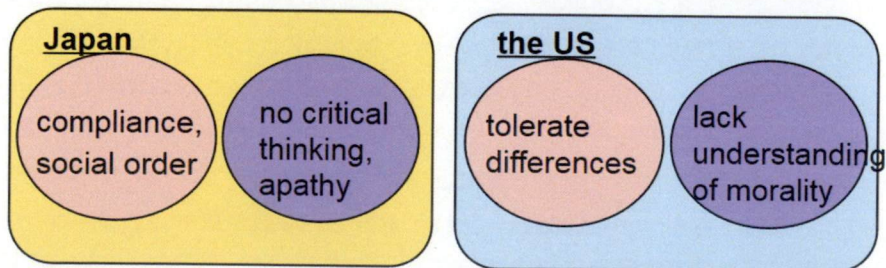
第3開催地ニューヨークでは、道德教育の中でも日米の公教育に焦点を合わせた。そもそも、道德教育とは社会の秩序を実現するために存在していると定義した。そのために、学校は児童生徒に教育を施し社会への帰属意識を芽生えさせる。日米の比較において見受けられた違いの一つとして「教育方法」が挙げられる。日本はカリキュラムの一環で道德の時間を設け、理想とされる行動を教示している。それに対して、米国は国語の時間などで、潜在的に社会が求めている行動を児童生徒に考えさせる。よって、日本は画一的な道德が形成され、米国は個々によって異なる正解を見つけ出す。どちらの教育が良いか悪いかまでには辿り着けなかった。日本社会のまとまり、米国社会の多様性の所以が明らかになりかけたところで第4開催地であるワシントン D.C.へ。



ファイナルフォーラムにて用いられた、日米における道德教育比較の図①

最終地でもあるワシントン D.C.では、先ほど着目した教育方法の違いが如何なる社会的影響を及ぼしているのか、三つの視点に分けて模索した。対価を得る方法、極限状態での行動、死刑制度から日米の道德観を比較した。日本の特徴としては、集団への帰属意識が強く、社会の秩序を守る上では有利である。だがしかし、個々の柔軟性に欠け、新たな価値観が生まれにくい。反対に、米国は差異に対して寛容なため、まとまりとしての一体感がなく、混沌とした状態を避けられない。以上の特徴を考慮し、最後に理想の道德教育を提案した。日本の教育のように、道德の時間は設けられるべきだが、画一的な教えではなく、先生が生徒自身の発見を促す形で、教育に携わるべきである。そして、道德について各人が熟考するきっかけを創出し、何事も白と黒のみでは語れないことを認識させることが重要だと言う結論を出した。

Benefit/Criticism



ファイナルフォーラムにて用いられた、日米における道德教育比較の図②



Case study 1: Corporate pay system

Japan: Promotion by seniority

- ❖ Older worker can get the higher position
- ❖ 66.7% of people support **Older people or authorities are highly prioritized**



The US: Merit Pay system

- ❖ DOES NOT depend on the age but depend on the worker's performance

Emphasis on the significance of individualism



Case study 2: People's attitude towards committing crime

Japan: He should let his wife die

- ❖ The value of group cooperation and responsibility
- ❖ Participants are concerned with the possible loss that they may do to the store owner and others if they were in Heinz's position

focuses on the group interest

The US: He should steal drugs from a store

- ❖ Personal interest over group interest

focuses on the personal interest



Case study 3: Death Penalty

Japan: Support Rate 85.6% ↑



The Japanese society values a homogenous collectivism

the US: Support Rate 63% ↓



US society highly values individualism

2. the impact of moral education on society

Ideal moral education

- a specific class
- teachers are guides
- no specific textbook

we want to give students the opportunity to learn and understand **what morality is**, simultaneously, we want them to think critically and understand that **nothing is black and white**.

3. ideal moral education system

ファイナルフォーラムにて用いられた、事例研究と理想の道德教育

◆終わりに

分科会が設立された当初に描かれていた議論とは異なるものとなったが、日米の道德教育を比較することで得た学びは大きかった。教育こそ、これからの未来を変化させる力を持っており、道德教育は社会を形作る不可欠な存在である。日米学生会議で得た経験も、これからの未来を変化させる力となることが確信できる。八十年続く伝統ある体験を通じて、成長した若者が将来世界平和の一翼を担うことは間違いない。

最後にはりましたが、第 66 回日米学生会議の実現にお力添えをくださった皆様に厚く御礼申し上げます、分科会総括とさせていただきます。誠にありがとうございました。



ファイナルフォーラムを終えて、少し肩の荷が下りた分科会メンバー



分科会統括 ～日米関係におけるスマートパワー～

◆はじめに～スマートパワーとは？

「スマートパワー」とは、ハーバード大学のジョセフ・ナイ教授が提唱した新しい安全保障政策の概念であり、一言で言えば「ハードパワーとソフトパワーを組み合わせたもの」である。当分科会では、この「スマートパワー」という枠で、言葉の定義をはじめ、日米関係や太平洋の平和、望ましい安全保障のあり方などを検討してきた。

◆日本側代表団事前活動

春合宿

春合宿では、当分科会のキーワードとなる「スマートパワー」「ハードパワー」「ソフトパワー」の定義を明確にした上で、今後の分科会活動の進め方について議論を行った。

各用語の定義は以下の通りである：

ハードパワー：国家／非国家主体に対し、圧力をかけ自国の思い通りに内政・外交に影響を与える力
(例：経済制裁、軍事力、など)

ソフトパワー：価値観や政策の魅力などで、間接的に他国にある行動をさせる力
(例：対外援助、教育、エネルギー供給、など)

スマートパワー：上記のハードとソフトをバランスよく組み合わせた力

日本におけるスマートパワー
ハード：経済制裁、渡航禁止
ソフト：対外援助、技術

アメリカにおけるスマートパワー
ハード：軍事力、サイバー攻撃、経済制裁
ソフト：教育、ポップカルチャー、経済協定

以上の通りにキーワードの定義をした。

次に、当分科会の日本側代表団としての理念や目標について検討した。私たちは、日米関係におけるスマートパワーを行使する事で、JASCの理念にもある「太平洋の平和」を実現させることを目標にした。その目標の達成のために、日米同盟の重要性を再認識すると共に、太平洋の鍵を握る日米中の三カ国の良好な関係の構築、即ち三国同盟の可能性の検討や、領土問題や歴史認識の違いなど日本がアジア諸外国と抱える問題についての分析、TPP や APEC などの経済協定の考察などを課題として挙げ、春合宿を終えた。



防衛大学校研修

防衛大学校研修にて、防大生との合同分科会が行われた。JASC 側からは春合宿のプレゼンテーションの内容に加え、その後の定例ミーティングで議論した内容を発表した。防衛大学校側からは、「日米中の三国同盟を締結する場合、中国はそれに賛同するのか」「日本と中国の関係で、国民レベルでは魅力を感じているが、政治的にはソフトパワーの行使は難しいのではないか」「アメリカは具体的にどのように関わるべきなのか」など、鋭い質問が飛び交った。



次に、防衛大学校側からの発表が行われた。発表内容は以下にまとめた：

- ・ 日米の関係は日米同盟を主軸として考えるべきである
- ・ 日米同盟は軍事的安全保障の同盟であり、合同の軍事訓練や東日本大震災によるTOMODACHI 作戦が日米同盟の一環として挙げられる。
- ・ ハードパワー：経済・軍事力
- ・ ソフトパワー：文化・芸術・テクノロジー
 - 江戸時代の無血開城も一種のソフトパワーでは？
- ・ 「ソフトパワー」は相手が判断する。クールジャパンは本当にソフトパワーか。
- ・ 日米でスマートパワーの行使は現状では難しい。日本は軍事力を行使できないため、アメリカから恩恵を受けているだけであり、日本とアメリカでスマートパワーの役割分担が必要。

江戸時代の無血開城をソフトパワーの事例として取り上げたり、日米間による役割分担の提案がなされたりなど、新しい視点を取り入れることができた。また、最後に JASC 側と防衛大側と意見交換が行われ、「漫画はソフトパワーになりうるか」「ハードパワーの使い方を変え、ソフトにできないか（例：自衛隊の軍事力を災害援助として使う）」「日米同盟の不平等性」など、自衛隊の幹部候補生ならではの意見もあり、活発な分科会討論を行う事ができた。

定例ミーティング

定期的に行われたミーティングでは、本会議の準備に向けて、それぞれの興味・関心や分科会論文やフィールドトリップ先での意見共有を行った。ミーティングでのトピックは、「東アジア共同体の可能性」「国際秩序と平和」「日本におけるパブリック・ディプロマシーのあり方」「原爆ドームや原爆死没慰霊碑などの意義と役割」などを取り上げ、日本の持つスマートパワーを検討すると共に、アジア太平洋地域の平和維持と安全保障について見識を深めた。



フィールドトリップ

当分科会では3名の講師の方にお話をお伺いすることができた。安全保障分野でご活躍されている先生方からは、アジア太平洋地域の情勢や日米関係についてそれぞれのご経験から話をしていた。以下、私たちが感じたポイントをまとめる：

◆ 森本敏先生（元防衛大臣）

- 米国の「リバランス政策」：アジア太平洋との関係を重視。軍の再編や同盟国とのパートナーシップの活用、グローバルコモنزの共有、海洋進出する中国への対応。
- 現代の日米同盟の見直し。

◆ 細谷雄一先生（慶應義塾大学法学部教授）

- 日米は、韓国やフィリピンと共に協調し、スマートパワーを発揮すべきである。
- アジアの地域統合は、EUのように同じ価値観がないから実現は難しい。特に、歴史認識の差が大きな影響を及ぼしている。

◆ 田中均氏（日本総合研究所 国際戦略研究所理事長）

- アジア共同体の創立には、関税撤廃や経済統合、海賊やテロ予防などの非伝統的安全保障分野での協力関係が不可欠である。
- ASEANを中心とした強国によらない運営体制が必要。

直線合宿（事前活動まとめ）

春合宿から始まった当分科会の事前活動の集大成としての直前合宿。3ヶ月の事前活動にて、日本側代表团としては「スマートパワーを活用した東アジア共同体の実現へ」を大きなテーマとして準備を進めてきた。そのために、スマートパワーの再定義やアメリカの関わり方、中国からどう協力を得られるかなどを議論してきた。その他にも、日本の憲法第9条の再解釈や集団自衛権についてもトピックとして挙げた。また、フィールドトリップの先生方もおっしゃっていたように、日本はもちろん、アメリカにとってもアジア太平洋の良好な関係は重要であると再認識し、本会議でもこれらについて議論していきたいと意気込んだ。

◆ 本会議

アメリカ側代表団の準備

本会議前に集合したアメリカ側代表団は、各人のRTペーパーを共有し、本会議で日本側と議論したいトピックを決めた。彼らから、集団的自衛権や平和構築のための日米関係はもちろんのこと、パレスチナ問題やオリンピックをディスカッショントピックとして提案された。東アジア共同体を中心に議論を進めてきた日本側としては、スポーツ祭典「オリンピック」をスマートパワーとして捉える視点はとても新鮮で、このテーマがスマートパワー分科会の本会議の議論の大きな鍵となった。



ファイナルフォーラムに向けて

日米それぞれの事前活動と各人の RT ペーパーの共有後、当分科会は、改めてスマートパワーの定義をお互いに確認し、スマートパワーの活用方法について議論した。私たちは単なる意見交換だけではなく、チームとして一つの政策を提言することを目標に置いた。また、スマートパワーの定義については、ジョセフ・ナイやこれまでの定義に概ね依拠して議論を進めることにした。分科会活動の中では、東アジア共同体創立や安全保障制度について議論したい日本側と、2020 年の東京オリンピックに向けた政策提言をしたいアメリカ側との対立があった。最終的には、2020 年東京オリンピックを起点とした日本の再活性化モデルを提案しようと発表の準備を進めた。

ファイナルフォーラム

“Re-energizing Japan Through TOKYO 2020”

当分科会は、ファイナルフォーラムにて一つの政策を提言した。少子高齢化や経済不況、中国などの近隣諸国の台頭により、日本のプレゼンスが低下してきている。一方で、2020 年の東京オリンピックに伴い、「おもてなし文化」や東京のコスモポリタン都市としての発展など、ポジティブな要素もある。そこで、我々は東京のリブランディングが必要であると考えた。「スマートパワー」の観点から、以下の通りの対策を考案した：

ソフトパワー	ハードパワー
◆ 経済機会の増加 —インフラの強化 (wi-fi 使用可能区域の拡張、公共交通機関の改善など) —アメリカとの経済協定の強化 ◆ 文化的魅力の増加 —女性や社会的少数者の社会進出促進 —子育て環境の整備	◆ セキュリティ（軍事力）の強化 —人的・物的資源の充実 —サイバーセキュリティ ※ 憲法第 9 条の改正（ハードをソフトへ） 「平和活動のみに関して、軍事力を持てる」との一文を加えることによって、日本が国連の PKO 活動などに参加できるようになると考える。

このように、ソフトとハードの充実によって、“Safer Olympics, Safer Nation”というイメージを世界に発信する事で、日本のプレゼンスを高めると共に、レガシーとしてひとつのオリンピックモデルを TOKYO2020 で確立させることができると結論付けた。

◆終わりに

「スマートパワー」という難しい枠組みでの分科会ではあったが、参加者は積極的に議論に参加し、チームとしてひとつの結論に達する事ができ、分科会コーディネーターとしても嬉しく思う。当分科会の発表は、駐米日本大使館の方々からも高い評価を頂くこともできた。最後に、当分科会活動をご支援して下さった全ての方々から心からの感謝を申し上げ、分科会の総括と致します。



分科会統括 ～技術進歩と社会～

◆技術進歩と社会分科会の意義

便利さを追求する中で様々な技術が発展してきた。技術の進歩によって生活はより便利になったものの、同時に疑問も投げかけなければならない。技術の進歩によって人々は幸せになっているのだろうか。当分科会では、絶え間なく進歩する技術を一度立ち止まって捉える。技術進歩が社会にもたらす功罪を様々な実例に基づいて検証し、技術とどう向き合うか、どのように活用するかを考察する。

◆分科会活動

当文化会は、遺伝子組み換え食物、原子力使用の是非、出生前診断など、新たな科学技術によってもたらされた問題について議論した。これらのトピックは参加学生の興味関心に基づいたものである。遺伝子組み換え食品は、本会議の第1開催地が、農業が盛んなデモインで開催されたことが影響したと思われる。原子力使用の是非は福島原発事故後の脱原発議論に対する日米双方の学生の関心の現れでもある。出生前診断に関しては、日米で生命倫理への価値観が大きく異なることからトピックとして選ばれた。

答えのない問題を前にして最も重要な事は、多様な視点を取り入れ、争点を発見していくことである。そのため当分科会はディベート形式を取り入れ、敢えて自分の意見とは異なる視点に立って議論に挑んだ。またフィールドトリップに行く事で問題の現場で働く人の意見も取り入れた。

◆日本におけるフィールドトリップ

・横浜市立横浜サイエンスフロンティア高校

Science Literacyという授業を通して科学に対する批判的な思考を教えている現場を視察した。科学的な客観性で問題を捉えることの重要性を体感した。

・東海大学医学部

生殖医療に携わっている医者のご意見を伺った。着床前診断を行なった患者さんは心理的な負担が依然として大きいことを知った。生殖医療による長期的な問題点は今後慎重に検討しなければいけないとのこと。



横浜サイエンスフロンティア高校での様子

◆本会議における主な議題

時間の制約がある中で深い議論を目指すために、それぞれが事前提出論文で扱った議題の中から、集中的に議論する議題を3つに絞った。

①遺伝子組み換え食物

遺伝子組み換え作物の種子開発で名を挙げているモンサント社の支社が所在するアイオワ州を訪れた。見渡す限りのコーン畑の中には遺伝子組み換え（以下GMO）コーンが多く使われている。本会議3日目には Mr. William HoranとDr. Stephen Sappによる農業フォーラムを開催し、GMOの是非について代表団一同と



議論をした。お二人方は途上国の発展による食料需要増加に対応するために高収穫効率なGMOの必要性を訴えた。一方で学生側は安全性や環境への影響に対する疑問が沸き上がった。当分科会においても同様にGMOの可能性と安全性に対する議論が中心であった。

Q.途上国は食料供給のためにGMOを使用すべきか

GMOは害虫に強く、短時間で多い収穫を得ることができるように仕組むことが可能である。また特定の栄養素を増加させることで不足しがちな栄養を補給することも可能である。例えばゴールデンライスというGMOの品種はビタミンAの原料となるβ-カロテンを豊富に含むことで、途上国に多いビタミンA欠乏症を防止することができる。このような特性から食糧難の途上国ではGMO使用を増加すべきとの主張がある。しかし一方で学生からは、まだ開発から数十年しか経っておらず、環境や人体に対する危険性が解消されていないGMO技術を途上国に輸出するのは無責任との声があがった。また、技術が安全と見なされても、途上国がモンサント社のような大企業の自社製品に依存する体質が見受けられるためにGMOを使用すべきでないとの反論が上がった。米国は過去に途上国農業支援としてモンサント社のGMO種子と除草剤をセットで導入したが、そのGMO種子はモンサント社のみが開発する除草剤を使用しなければならず、途上国の農家は永続的に購入を強いられた例がある。

最終的に途上国ではGMOの使用は必ずしも必要ではなく、根本的な農業改革と支援が必要との意見に落ち着いた。統計的には世界で生産される食料は世界人口を賄うことができることが示されていることから、食料難打開の鍵はGMOではなく先進国のゴミ廃棄に原因があるのではないだろうか。

GMOの議論を通して感じたことは、農業は文化や根本的な価値観と深く結びついているため、必ずしも論理的でない意見が出る事である。GMOに関して科学的に安全性が確認されたとしても依然としてGMOを敬遠する人は多いであろう。技術進歩に関してはこのように感覚的に受け入れ辛い部分もあるが、そのメリットを客観的に分析することが重要である。

②原子力発電所

福島原発事故を背景に、日本における原子力発電の必要性について議論した。経済と安全の二つの軸が議論の中心であった。

Q.日本に原子力発電所は必要か

経済：

【賛成】喫緊の問題として日本は原子力によるエネルギー供給がなければ石油などの大量輸入により経済が落ち込んでしまう。

【反対】長期的にみると発電所の解体費、核燃料の処理、事故が起きた場合の損害額によって原子力は必ずしもコストが安いとは言えない。そもそも核のゴミの処理方法が確立されていない中で原子力を使用し続けるのは無謀であり、経済的にも埋め立てのコストは高い。

安全：

【反対】日本は地震多発国であるので今後も大きな地震は必ず起きる。ヨーロッパと違って日本はそもそも原子力に向いていない。安全は経済効率性と同等に比較しうるものではない。

【賛成】どのようなエネルギー発電所にも事故の危険性がある。今回の事故によって原子力規制委員会が設立され、事故の反省を活かした基準作りがされる。このように反省から学べばより安全性は高まる。危険だからといって原発を葬り去るのではなく、反省を活かした技術の活用こそが技術と向き合う正しい姿勢だ。



日米双方の学生にそれぞれ原発推進派と反対派が存在していたことが特徴的であった。原発に関しては国による違いよりも、どのような価値観を優先するか、例えば経済が重要なのか安全が重要なのか、による個人的な判断が意見を左右することが見受けられた。

③出生前診断

出生前診断は胎児の染色体異常を診断する技術である。日本では高齢出産で胎児に異常が起きる確率が高い際に診断することができる。問題となっているのは胎児に異常がある可能性が高いと診断された場合、堕胎する例が多いことである。不用な堕胎が増えることや、命の選別によって優勢学的な思考が蔓延する危険性などがある。

遺伝子分析技術の発展に基づき、先天性異常が少ない受精卵を選ぶ事や男女の生み分けも可能となってきた。出生前診断から議論は進展し、遺伝子情報分析の持つ危険性やデザイナーズベビーについても議論をした。遺伝子操作の度合いによってどのような生み分けは許容しうるかを以下のように4段階に分けた。

1. 重度な先天的病気の排除
2. 先天的な病気の排除
3. 性別の選択
4. 身体的特徴の操作

第一、二段階において多くの人がこの場合における出生前診断を認めた。我が子に先天性異常があることは事前にわかった方が生んだ後の対応を柔軟にすることができるとする主張が出た。堕胎をする件数は確かに増えそうではあるが最終的に個人の判断を重視しなければならない。ただし診断後のカウンセリングによる心のケアと正しい選択のためのアドバイスも重要である。

第三段階においては多くの者が反対に回ったが、この基準を認める人もいた。反対する者は社会の均衡が崩れることを最も危惧した。一方で賛成した者は親の自由の範囲内であり、全員が必ずしも男女の生み分けをしなくても選択肢として残すことは悪いことではないと主張した。

第4段階も反対する者が多数であった。賛成する者は白人男性であったが、それに対してアメリカ側のアジア人女性が、白人が優勢的な社会では必ず金髪白人の子供を望む人が増え、優生学的思想が蔓延すると強く主張したことは印象的であった。

個人の自由が強く主張されるアメリカであるが、なんでも個人の自由のもと許されるわけではなく、社会全体への影響を分析しなければならないという全体における合意は特徴的であった。

◆経済効率以外の価値観

どの議題にも共通して見えた対立軸は経済効率性や利便性の軸と倫理や安全性の軸であった。GMOや原子力など様々な技術進歩は経済的にメリットが多いとされ我々の社会の「豊かさ」を牽引する潜在的な力を持つ。しかし「豊かさ」と経済的な効率性が等号で結ばれるものではないことが議論を通して顕在化した。GMOによって食料自給率が上がっても、長期的に人体の影響があっては無意味であり、原子力発電所によって今はエネルギー供給ができて福島原発事故のような事が再びあっては経済的な発展は意味をなさな



い。経済効率意外にも安心、安全といった重視すべき価値観が確認された。ただ注意したいことに、経済効率性は依然として重要な指標である。世間では感情論に基づく議論も多く見受けられるためデータに基づく客観的な分析が必要であることはいうまでもない。

「脱成長」や「持続可能性」といった考え方が頻出するようになった現代、何のための成長か、何のための技術進歩なのか、といった疑問は今後も問われ続けるであろう。このことは日米において差異があることではなく、現代の若者、社会の特徴とでいえる。

◆分科会総括

議論をする中で、以前持っていた意見を考え直す事が多々あった。渡米前、多くの日本側参加者は、国家の安全保障のためなら政府がインターネットの個人情報を利用してよいだろうと感じていた。しかしアメリカでは、個人情報に対する態度は大きく異なっていた。政府からの自由を強く追求するアメリカでは、政府の個人情報利用に懐疑的な意見が多かった。対テロリズムという名目で不当に拘束され、市民の知らないところで電話、メールなどの個人情報が監視されているからだ。我々はEFF(Electronic Frontier Foundation)というNSA(アメリカ国家安全保障局)の個人情報操作に異議を唱えるロビー団体を訪問し、個人情報の保護を巡る熱気を肌で体感した。日本での準備活動中には欠けていた視点を得たことで、この議題の本質的な課題がみえてきた。

多様な意見を取り入れると共に、感情論を避け、数字やデータの裏付けをもとに議論をするよう意識した。例えば遺伝子組み換え食物を巡る議論では、科学的な根拠もなく体に悪影響があるとの考えが蔓延していることに気付いた。

最終的に当分科会は各議題の争点をいくつかの視点から分析して、ファイナルフォーラムにて視聴者に発表をした。答えがないという問題の性質上、議論の両側面を与え、どの立場をとるかの判断は視聴者各自に委ねた。

このように発表という形で私たちは分科会の成果をまとめた。アカデミックさを追求するならば、専門的な知見をもった大学院生が集まって、研究をした方が「成果」は出たかもしれない。ただ当分科会は政治、生命科学、医学、経営学、など様々なバックグラウンドを持った学生の集まりであり、専門集団とは到底いえないだろう。議論した内容は既存の議論に止まっていたかもしれない。だが学生が真剣に社会の問題に向き合い、議論をした事実こそが重要である。そこには伝えきれない数々の妥協、挫折や迷いが繰り返され、相互理解に結びついた跡が刻まれている。当分科会の真の価値はそこにある。

技術進歩と社会分科会の成果が本当に花開くのは、日米学生会議が終わり、各々の歩む道においてである。時には苦しい思いをしながらも議論をまとめあげた経験はきっと今後社会でも生きてくる。今後お互いがどのように活躍するかが楽しみだ。

最後になりますが、当分科会にご協力頂きました多くの皆様に深く感謝を申し上げ、分科会総括とさせていただきます。



分科会論文 例
(日本側)

Morality and Justice in Business

Soka University
Satoshi Takenaka

I. Introduction

One of the great debates of modern capitalism is morality in business. During a debate, this question is often posed as “Should the companies prioritize social responsibility over profits? Or, “Should companies focus solely on maximizing profits to favor shareholder interests?” The former implies that all companies should be held to moral standards. On the other hand, the latter question is focused on the principle of capitalism that profits come first (Hwang, 2012). In general, the discussion of morality and justice would be entirely theoretical, and it is difficult to put into practice. However, I really would like to have a fruitful and practical discussion so that is why I chose “morality and justice in business” as a topic. Moreover, this topic has an increased need for fundamental, meticulous discussion after the economic crisis in 2008.

The Lehman Brother’s bankruptcy in 2008 highlighted the negative ethical practices that affected the current financial crises in the US. In fact, Lehman Brothers Holdings Inc. used to trade on the New York Stock Exchange as the fourth largest investment bank in the US. However, on September 12, 2008 it found itself under financial predicaments when it filed for bankruptcy. This was mainly because Lehman Brothers had been taking excessive risks to the point that it became insolvent. Lehman Brothers accelerated the global financial crisis and sparked debate over ethical issues on Wall Street and in the financial industry in general. The financial crisis put the whole world in jeopardy, thus understanding the moral aspects and the ethical implications of the matter helps in understanding how crucial ethics are for the success of any business. Consequently, exploring the Lehman Brothers case will not only give a clear image of how important ethics are in business but also steps to be taken to deal with them on large scale (Cassidy, 2013).

In the 66th Japan America Student Conference, I would like to discuss the topic of morality and justice in business because I am sure that it can be highly motivating for us to build a spirit of fairness in business. Moreover, it can be a subject of heated debate among us because there is ideological conflict between Utilitarianism (Fundamental of Capitalism) and Humanism in business. Thus, this essay will examine the idea of Utilitarianism and Humanism and use two case studies to hold an introductory discussion for JASC.

II. Utilitarianism

Jeremy Bentham who is regarded as the founder of modern utilitarianism developed his ethical system around the idea of pleasure. He built it on ancient hedonism which pursued physical pleasure and avoided physical pain. The utility of human actions is their tendency to promote the common end of all such actions – happiness; and from utility in this sense. In other words, the principle of utility should be the basis of morality and law, and by utility he understands whatever promotes pleasure and prevents pain (Anderson, n.d.). According to Bentham, the most moral acts are those which maximize pleasure and minimize pain. This has sometimes been



called the "utilitarian calculus." An act would be moral if it brings the greatest amount of pleasure and the least amount of pain.

Furthermore, Bentham can be regarded as the real father of technical economics, and certainly the father of cost-benefit analysis used in policy analysis today. Should we hire an additional sales person or assign overtime? Is it a good idea to purchase the new stamping machine? Will we be better off putting our free cash flow into securities rather than investing in additional capital equipment? Each of these questions can be answered by doing a proper cost benefit analysis (Reh,n,d.). First, we observe and list all alternatives. Then, we calculate all of the costs and benefits of each and select the one with the greatest surplus of benefits over costs. Having analyzed all of the benefits of this policy and subtracted all of the costs, the right thing to do is to choose the option which maximizes happiness over suffering. This utilitarian logic, which is under the name of cost-benefit analysis, is used by companies and by governments all the time. Also, they place a value - usually a dollar value - to stand for utility on the costs and the benefits of various proposals. I think that this shows that capitalism still justifies utilitarianism.

III. Humanism

Utilitarianism has been embraced by so many simply because it seems to make a good deal of sense and seems relatively simple to apply. However, utilitarianism was a radical philosophy. It attempted to set forth a moral system apart from divine revelation and biblical morality. For instance, utilitarianism fails to respect individual rights. The utilitarian logic, if consistently applied, could "sanction ways of treating persons that violate what we think of as fundamental norms of decency and respect" meaning that if this way of thinking was utilized by everyone, punishment would be much more severe for minimal offenses. Human rights are usually said to be inalienable and universal, and some even believe that they should be absolute. Such attributes are necessary in order for human rights to protect all humans at all times. A prime motivation for rights in general is to ensure that no-one is subject to unbridled calculations of utility, so that the minority does not suffer in order that a great number enjoy some benefit. If anything is to stand in the way of governments or societies sacrificing individual or minority interests in favor of the collective, it is the bulwark of human rights (Heard, 1997).

IV. Case Study - Child Labor and Prostitution -

1. Walt Disney Company: Child Labor

There was continuing criticism of conditions in Chinese factories producing Disney-branded toys. In December 2008 the National Labor Committee came out with a report entitled "Toys of Misery Made in Abusive Chinese Sweatshops", which described 96-hour workweeks, rampant wage theft and brutal conditions at a factory in Dongguan in which Disney toys were being manufactured. A 2010 report by China Labor Watch argued that Project Kaleidoscope had failed to eliminate labor abuses at Disney supplier factories and described widespread use of child labor at two such plants (Mattera,n,d.).

According to International Labour Organization, the term "child labor" is often defined as work that deprives children of their childhood, their potential and their dignity, which is harmful to physical and mental development.

From a humanist's point of view, Child labor must be prohibited because it is mentally, physically, socially or morally dangerous and harmful for children. Also, it



interferes children from being able to attend school. In other words, child labor oblige them to leave school prematurely or requiring them to attempt to combine school attendance with excessively long and heavy work.

Under a principle of capitalism, however, one could argued that Walt Disney Company could make profits with inexpensive labor, and it can offer products for consumers as cheap as possible. Furthermore, children also can earn money (often for family) even though it is a little. Child labor is pervasive for the simple reason that impoverished households who cannot meet their basic needs may depend on the income of their children for survival. In many cases, these families are so poor that every member of their family needs to work. It is likely that these families cannot afford the cost of education for their children. Child labor creates a trade-off between labor and education. However, if their choice is either starving or going to school, isn't survival the obvious choice? (CCA LiveE, 2010).

2. The Philippines: Prostitution

According to Harry Thomas Jr. who is a United States ambassador to the Philippines, 40% of male foreign tourists to the country visited only for sex. The Philippines' tourism industry is a regional laggard, underscoring the country's security problems, poor infrastructure and unimaginative marketing campaigns. Last year's figure of 3.5 million tourists marked an all-time high, but paled in comparison to most of the country's regional neighbors. While the total number of visitors may be small, the number of sex tourists is believed to be growing. Males make up over 65% of all tourist arrivals. (Adriano, n.d.).

From a humanist's point of view, the rise of sex tourism will be followed by HIV /AIDS transmission prevailing among sex trade workers. Furthermore, women and children involved in prostitution are vulnerable to rape, murder, AIDS, and other sexually transmitted diseases.

Under a principle of capitalism, however, one could argue that sex tourism industry plays a big role in every country's economy. For example, it contributes billion dollars a year in The Netherlands and accounts for five percent of the Dutch economy. How can the Sex Tourism bring such revenue? Sex Tourism increases tourist traffic in a country. Thus, it increases the flow of foreign currency fund in a country. Since sex tourism increases tourism arrivals, it helps develop the tourism industry which in turn will create more jobs in a country. More jobs mean lesser poverty. Lesser poverty means a good and stable economy. Furthermore, since sex tourism can help mature the tourism industry, all sectors ancillary to it also blooms.

V. Conclusion

"Control our business; don't let it control us". This is my opinion for this topic. Business, by its very nature, has economic efficiency and the pursuit of profit as its prime objectives. If a businessman allows himself to be controlled by his business, and thinks only in terms of corporations and capital, it will lead him to fight for profits – a behavior which has also frequently caused wars to be fought. I also would like to stress that in business, it is very crucial to always consider the greater, holistic interest of the entire planet and of humankind. Having this in mind, it would even enable one to make judgment through the willingness to rise to the nobility of self-sacrifice that transcends personal gain and profit.



■ References

- Adriano, D. J (n.d.). Sex: A growth industry in the Philippines Retrieved from http://www.atimes.com/atimes/Southeast_Asia/ML20Ae01.html
- Anderson, K (n.d.). Utilitarianism: The Greatest Good for the Greatest Number Retrieved from http://www.probe.org/site/c.fdkEIMNsEoG/b.4224805/k.B792/Utilitarianism_The_Greatest_Good_for_the_Greatest_Number.htm
- Burns, H. J (n.d.). Happiness and Utility: Jeremy Bentham's Equation Retrieved from <http://www.utilitarianism.com/jeremy-bentham/greatest-happiness.pdf>
- Cassidy, J (2013, August 28). WHAT HAS CHANGED SINCE LEHMAN FAILED? Retrieved from <http://www.newyorker.com/online/blogs/johncassidy/2013/08/mr-paulson-and-the-banksters-whats-happening-now-hank.html>
- CCA LiveE (2010, December 5). The Benefits Of Child Labor In The Developing World Retrieved from <http://www.triplepundit.com/2010/12/gasp-benefits-child-labor-developing-world/12>
- Heard, A (1997). Human Rights: Chimeras in Sheep's Clothing? Retrieved from <http://www.sfu.ca/~aheard/417/util.html>
- Hwang, W. V (2012, October 23). My mission: building ecosystems to empower innovators & dreamers Retrieved from <http://www.forbes.com/sites/victorhwang/2012/10/23/does-morality-matter-in-managing-businesses/>
- International Labour Organization (n.d.). What is child labour? Retrieved from <http://ilo.org/ipec/facts/lang-en/index.htm>
- Mattera, P (n.d.). Walt Disney: Corporate Rap Sheet Retrieved from <http://www.corp-research.org/disney>
- Reh, J.F (n.d.). Cost Benefit Analysis aka Running The Numbers Retrieved from <http://management.about.com/cs/money/a/CostBenefit.htm>



分科会論文 例
(米国側)

The Art of *Identitea*

Wellesley College

Naomi Cormier

While sipping a cup of tea on a rainy day, have you ever thought about the fact that you were sipping on a drink of global culture dating back to 2737 B.C.E.? Tea drinking, originated from China, has become a drink that transcends cultural boundaries: a drink that brings people from all nations together. Tea was first introduced as a medicinal drink in China by Emperor Shennong, and has stayed an integral part of societies around the world. East Asian countries have consumed tea not only for health purposes, but it has also evolved into a form of art. In Japan tea ceremony is one of the most highly treasured and long-standing art forms. Tea, a universally appreciated beverage, plays a distinct role in symbolizing identity. I will be exploring the different ways in which Japanese tea ceremony connects to today's people in society and their roles and identity, present and in the future. Tea ceremony is performed with four key principles in mind: Harmony, respect, purity, and tranquility. By exploring these four themes as a foundation for research, we can observe and question what people in both Japanese and American society face in respect to identity. Tea culture, a commonality between Japan and the U.S., provides a subtle yet significant way in which intellectuality can cross cultural boundaries.

Japanese tea ceremony is a ritualistic art form of abstractness, symbolism and formalism, founded in Zen Buddhism. In China, tea was an expensive form of medicine, and was introduced to Japan by a Buddhist monk in the 12th century. The custom of tea drinking spread through Buddhist monasteries and the upper class samurai warriors, who regarded tea drinking as a marker of their high status in society. The aim of Zen Buddhism is to purify the mind, and drinking tea was one of the main ways in which this is attempted. Many forms of grace and etiquette are embedded in the art of tea: a sense of discipline, respect for nature, cleanliness, punctuality, etc.: "Every single action in Chanoyu is minutely calculated to achieve the highest possible economy of movement, simplicity, and finesse. Every single procedure is performed in a very specific and exact motion." (Chanoyu) Tea ceremony, or *chanoyu* in Japanese, holds and teaches countless traditional values not only within Japan but internationally as well. Historically, tea culture is a female art form. The reason for this is woven into the history of heteronormative societal expectations: "In the old days of Japan, the knowledge of tea ceremony was considered to be a requisite for young ladies before marriage to cultivate refinement." (Chanoyu) The expectation for women to refine themselves for society is clear here, and although refinement is not always a negative notion, both Japanese and American cultures have kept women living under a glass ceiling in terms of women in the work force, for example. Although tea ceremony teaches important moral values, they are extremely traditional and not susceptible to wide interpretation or change. Although tea ceremony has



provided guidance for those who have been influenced, there are some ideas and traditional values, which may pose controversy when truly thought about.

Japanese tea culture abides by and projects strict rules and traditional values. The ceremony is reflective of the culture's steady attitude towards respect, loyalty and the paramount beauty of simplicity. This is a stark contrast from the tea culture in the U.S. Although some similarities do exist, tea in the U.S. is served in a much more casual setting. A woman may invite her friends over for tea and cookies, or make tea in the morning to put in a mug and bring to work. Tea has become so globalized that each country has given it new meaning and significance, which is both beautiful and interesting.

It can be seen that tea has become a global phenomenon. So how has tea contributed to multiculturalism? The eventual spread of tea across the world has brought people together, for a simple conversation over a hot cup of green tea, to making business decisions while sipping the same hot green tea. Tea is a drink that is universally accepted as a calming and centering drink. This basis of unity over a drink is unique and unifying. I am Japanese-American, born in Hokkaido. My Japanese mother and my father from the U.S. met while teaching English in Tokyo, 21 years ago. Since their wild decision to marry into contrasting backgrounds and cultures, they have raised five multicultural children and students. Being the eldest, I have had the maximum amount of exposure to both Japanese and American cultures, and my upbringing has positively shaped me into the thinker I am today: "The multicultural person is intellectually and emotionally committed to the basic unity of all human beings while at the same time recognizing, legitimizing, accepting, and appreciating the differences that exist between people of different cultures." (Adler) Having been raised bilingually, it has been made possible for me to attempt understand both cultures, and without the language barrier I have been able to connect and communicate with friends, family, students, and professionals from both of my home countries. At times I felt that my identity was split, or forced apart into my two "halves". When people would find out I was Japanese-American, some would ask me if I "felt more Japanese" or ask which country I liked more. I always answered neutrally, for I felt that if I sided on either side it would be a betrayal to at least one of my parents, and to myself as well. I have tried to make the most of being biracial; it's like having a secret weapon: "It is in truth not standing still, but rather a crossing and return, a repetition of return and crossing, back-and-forth--the aim of which is to create a third area beyond the bounded territories, an area where one can stand for a time without being enclosed in something tightly bounded." (Paul Tillich, 1996) Multiculturalism exists in many forms, not necessarily in the form of being biracial. As long as one has the diligence to learn and explore other cultures, they will experience just as much enrichment as I have.

When Americans think of Japanese culture, tea ceremony may be one of the first stereotypical cultural markers that come to mind. This is due to the popularity of tea around the world, and the ability to relate to the ceremony is a way for foreigners to get involved in cultural integration and exploration. Japanese tea ceremony has been brought over to the U.S. to be taught in cities and schools. Although the rituals may be altered to fit the needs of the country, the significance of the ceremony is taught and



understood. Tea drinking has become almost a daily habit for many people today, mostly for social reasons. Social events often revolve around tea drinking, and continue to bring people of all different types together.

When I ask my friends in Japan what they think of America, they say the people are beautiful and the food portions are larger than their own heads. America is known for being beautiful, innovative and grand. Although Japan is similar in these aspects, mostly everything in Japan is made with the theme of simplicity. This is why tea ceremony abides by the intricate yet never altering rules, which provide the simple basis of strength and repetition. The dedication and hard work that comes with performing tea ceremony deserves respect. Two summers ago I participated in a tea ceremony in Asahikawa, Japan at my girls' high school. After watching the tea instructor move gracefully and flawlessly, I was struck by the simple movements that were performed with such purpose and poise. It was beautiful: "In the art of tea the term *Ichigo- Ichi-e*, meaning "one chance in a lifetime," is of extreme importance and signifies that the tea master tries to make the tea with his whole heart." (New Encyclopedia) The simplicity, though, comes with strict rules, and one of those rules is respect. When I walked into the tea-room of *tatami*, straw mat, my friends whispered to me that my shoes must come off, that I had to step onto the mat a certain way, and that my steps had to be small and humble. In Japan it seems that humility and respect are one in the same thing. Respect is incorporated into the language itself: there are both the honorific and humble forms of speech. In addition to that, with the virtue of respect in mind, people are expected to say what is supposed to be said, instead of what one actually means to say: "Related to the hierarchical language usage they had to face the *ura-omote* dichotomy, referring to the difference to what one really feels and what one ought to feel. In relation to the *ura/omote* dichotomy, one should express the *omote*, which is deemed appropriate and proper in the public sphere, whereas the *ura* point of view, or what one really feels should be kept to oneself or to the own group, not to be divulged in the public." (p.279, Pang) The fact that respect is fully interwoven into the language shows how ingrained it is into the daily lives and thoughts of Japanese speakers, therefore a part of their identity.

Respect is not the highest virtue in here in America. I would say the highest virtues are independence and success. These qualities shape the way people think, act and live, thereby creating contrasting societal structures and hierarchies. In the United States, it is expected of people to speak their minds and have their own opinions. Even if you are talking to someone who is much older or smarter than you, it is culturally accepted to say what you mean. The respect in Japanese culture engulfs all types of respect, especially respect for elders. This notion of treating elders with the utmost respect reflects what the country truly values above all. Tea culture introduces an entirely new level of respect.

There is a great amount of respect around Japanese nationalism, for it is a marker of Japanese identity. When Japanese citizens speak of their country, they almost always refer to Japan as "we" or "our country". By erasing the notion of individualism and becoming a part of the country, the Japanese have a nationalistic way of thought that has brought them together in times of hardship, but has also drove them into hardships (such as wars) as well. "While searching for a place to live in



Tokyo, I was asked by a real estate agent if I would like *tatami* (straw mats) in my apartment. When I answered in the affirmative, she straightened up and slowly bowed, saying, 'Thank you very much,' as if I had just paid her a personal compliment. The anecdote illustrates 'proprietary nationalism,' or the notion that a people somehow lay claim to ownership over certain behaviors, customs, food, or material culture." (McVeigh, p.19) Although nationalism has become a part of Japan's identity, since the end of WWII it has become contradictory and less appreciated. When an entire country is thinking the same way, it could go very well or end very badly. In the case of WWII, Japanese citizens were so loyal to their country that it resulted in bad leadership leading to far too many casualties and losses. Since the end of the war, Japan has made a considerable effort to attempt at individualism and move away from nationalism: "Selfhood is inextricably woven into the fabric of Japanese society. The individual clamors for autonomy and independence are audible, but the voices seem drowned out by the tribal chorus of the fallen empire." (p.121, Miyoshi) This shift of identity has been heavily influenced by the ideas of the West. After the war, Japan began taking on bits of western culture and integrating it into their own lives. The fashion industry began to change and come more westernized, American companies began to flood the streets of major cities, and most importantly the youths of Japan began to love and take interest in the ways of the western nations, particularly the U.S. This change in generational mindset was the inception of a new age of transnational and multicultural way of thought, gradually moving away from the nationalistic philosophy.

Tranquility is the last theme of the tea ceremony. It can be agreed that tea, no matter where you may sip it, causes peace of mind. The mentality of tea drinking is meditative, teaching how to stay calm and collected even amidst hardship: "Receiving a bowl of tea and the simple act of appreciating it can purge your mind. Peacefulness can be achieved through a bowl of tea." (Chanoyu) The simplicity of tea provides a therapeutic effect that has guided thoughts of forgiveness, respect, and so much more. The idea that one cup of tea can bring peace, even if it is for a little while, is beautifully simple and the ceremony gives the process elegance. Tranquility is not easily achieved; it takes incredible patience and time. The art of tea ceremony takes many years to learn well, and the process teaches students how they may incorporate tranquility into their own lives: "The tea ceremony requires years of training and practice... yet the whole of this art, as to its detail, signifies no more than the making and serving of a cup of tea. The supremely important matter is that the act be performed in the most perfect, most polite, most graceful, most charming manner possible." (New Encyclopedia) Patience is a virtue around the world, but especially in Japan. The U.S. is focused on the present, and getting as much out of a moment as humanly possible. This makes for a rushed group of independent people with all different kinds of goals and achievements. Yes, this quality is what makes the U.S. so unique, yet I find that Americans are oftentimes more than not rushing and not taking notice of the important little details that exist in our daily lives. The art of tea ceremony teaches how to achieve tranquility by providing a space to truly perform and reflect on one's own movements in a peaceful setting, and letting the beauty of simplicity shine through.



Similarly to how a painting can cause people to come together to discuss its meaning and detail, tea brings people of all cultures together as well. From providing a basis for cultural identity to breaking down mental borders, tea is a gateway for intellectual thought and a chance for international identity to arise. Getting people of all cultures together provides an opportunity to form a global community. In today's progressive world, we all must open our eyes, ears and minds to ideas not only of foreign countries, but also to our neighbors, enemies, and peers. The more open we are to be willing to be engaged and dedicated to the growth of the global community, the more we can all discover our global identity, the potential of which exists in all of us.

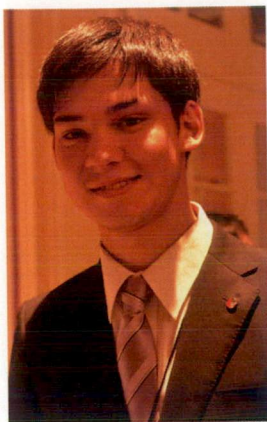
■Works Cited

- Chanoyu – Japanese Tea Ceremony *The Diplomatic Insight* April 30, 2012 Article Academic OneFile, Web.
- Adler, Peter. Beyond Cultural Identity: Reflections on Multiculturalism November 2002 Web.
- Japanese Tea Ceremony - *New World Encyclopedia*.
- Pang, Ching Lin. Negotiating Identity in Contemporary Japan: The Case of Kikokushijo 2000. Print.
- McVeigh, Brian J. Nationalisms of Japan: Managing and Mystifying Identity Rowman & Littlefield Publishers, Oct. 26 2004. Print.
- Miyoshi, Masao. Off Center: Power and Culture Relations Between Japan and the United States Harvard University Press, 1991. Print.



Delegate's Voice

会議参加者の声



矢島ショーン
東京大学

JASC は私にとって発見と刺激に満ちた会議であった。3週間以上に渡り、アメリカの各都市を周り、その文化を体験し、同年代のアメリカの学生と生活を共にしたことで、従来の今まで持っていたアメリカやそこに住む人々に対するイメージが覆され、同時に今後の人生に対する刺激を受けた。

最も想像と違っていたのは、アメリカに住む人々、とりわけ学生の多様性である。今まで、アメリカといえば私の中では白人社会であった。しかし、我々が訪れた場所がアメリカでもとりわけ多様性に富んだ地域であったのかもしれないが、実際は様々な民族的背景、価値観を持つ人々が暮らしていた。自らをアメリカ人と見なす人、アメリカに帰属意識を持たない人といったように、それぞれが独自のアイデンティティーを持ち、同じ社会で暮らしている。こうした社会は、西洋人との混血であり、日本社会において生まれてから常に否応なしに目立ってきた私にとって衝撃的であり、同時にとても心地よいものであった。

アメリカの学生とのディスカッションを通して感じたのは、特定分野に対する専門性と思考の柔軟性を兼ね備えることの大切さである。ディスカッションではまず議題に対して自分の専門に基づき、他のメンバーとは違った知識や視点を提示することが求められる。それが、自分がグループにおいて確実に果たすことが出来る役割である。一方で他の人の意見を理解し、自らのものと組み合わせ、その上に新しい考えを構築していく柔軟性も求められる。これこそが複数の人が集まって、議論することの意義である。今後の大学生活において、この専門性・柔軟性の両方を獲得し、様々な場面で役割を果たし必要とされる人物になれるよう努力して行きたい。

楽しいことも苦労もたくさんあったが、素晴らしい仲間に出会え、最高に密で、実り多い1ヶ月間であった。心の底から、この会議に参加して良かったと感じる。



原田有理子
九州大学

JASC が終わった現在、押し寄せる喪失感と共に、全てが非日常で、とても濃く、風のように過ぎ去っていったというのが正直な感想である。しかし確固として違う自分になった私がいいて、この経験を出来た事にとても感謝している。九州という地で、歯学という分野を学んでいる私は、就職活動もなく、歯科医師になるという以外の夢を持たず、敷かれたレールに従って進むという事に強い違和感を覚えていた。また国際的に活躍したいと発信すればする程、周囲から浮いてしまうという現実がただただ嫌でしかなかった。しかし JASC は、一人一人が熱い将来の夢を持っており、それを惜しみなく語れる。アメリカ人参加者との出会いは勿論の事、日本人参加者との出会いも、私の世界観を変える物となった。

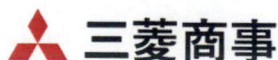
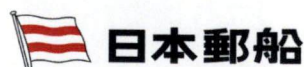
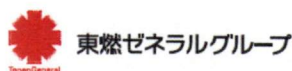
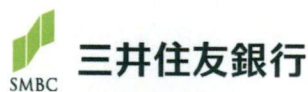
JASC で得た事の一つに如何に日本社会が、日本国民が「違い」に対して寛容でないかを実感した。LGBTQ、外国人労働者、特別永住者、宗教などを含め他人と異なる所を見つけてはそれを認めない現実が日本にはある。そしてそれは地方に行けば行く程濃く根付いているように思う。従って私は声を高らかにして叫びたい。より多くの日本全国の学生に同じような経験をしたい。JASC に参加して欲しい。その経験が日本をみる視点を換え、相手との少しの違いを受け入れられる社会を作る事に貢献すると信じている。相手の違いを受け入れなければ立ち行かない、即ち、日本は「日本人」だけでは機能しない時代に突入しているのだ。

JASC が存在する限り日本は、世界は良い方向へ進むという確信を持っている。出会った全ての JASCer が進む先で自らの力を発揮し、イノベーションを起こす人材になるであろう。私も JASC 参加で得た Life Changing Experience を誇るのではなく、JASC が誇る人材になるために日々研鑽を積んでいきたい。関わって下さった全ての方々に心から感謝しています。



Supporters

賛助企業・団体
ご協力いただいた方々
(敬称略・順不同)





【主催者および後援団体協力者】

一般財団法人国際教育振興会

理事長 大井 孝

参与 稲田 脩

事務局 後藤 明子

国際教育振興会賛助会

名誉会長 高円宮妃殿下

会長 南原 晃

事務局長 伊部 正信

事務局 川島 裕子

International Student Conference, Inc

理事長 Kristy Holch

事務局長 Yuuki Shinomiya

事務局 Chelsea Irvin

外務省

国際文化交流審議官 斎木 尚子

国際文化交流審議官 新美 潤

人物交流室長 浦林 紳二

人物交流室 課長補佐 三浦 恵子

文部科学省

国際統括官 加藤 重治

大臣官房 国際課総務 係長 原 文絵

大臣官房 国際課 丸田 俊徳

米国大使館

米国大使館首席公使 Kurt Tong

広報・文化交流部 教育・人物交流室

シニアプログラムスペシャリスト

落合 安代

ユース・アウトリーチ・コーディネーター

三橋 乃佑里

一般社団法人日米協会

会長 藤崎 一郎

専務理事 渡辺 隆

日米文化センター

日本代表 伊部 正信

【広報活動】

武田 興欣 青山学院大学国際政治経済部 准教授

敦賀 和外 大阪大学グローバルコラボレーションセンター 特任准教授

寺迫 正廣 大阪府立大学人間社会学部教授

栗林 知美 大阪府立大学国際交流課

森 純一 京都大学国際交流推進機構長
国際企画連携部門長 教授深原 優子 京都大学国際部留学生課
森純一教授研究室 秘書立原 公美子 筑波大学国際企画課
塚本聖筑波大学グローバル・コモンズ機構グローバル・コモンズ支援室

関根 広太 東海大学国際部国際課

田中 文恵 同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科・アメリカ研究所事務室 事務長

勇元 信彦 同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科・アメリカ研究所事務室 係長

箕浦 裕満子 名古屋大学国際学生交流課
学生交流掛 掛長



塩井 洋介 名古屋大学国際学生交流課学生
交流掛

田中 秀実 法政大学グローバル教育センター
事務局 グローバルラーニング課

菊地 端夫 国際教育センター副センター長
経営学部公共経営学科 准教授

杉浦 絵里 国際連携部国際教育事務室

丸山 加奈子 立命館大学国際教育センター
国際部 海外留学課

大島 英穂 立命館大学 国際部 事務部長

逢坂 豪 早稲田大学総長室 経営企画課

板垣 有二 株式会社 企業実務アシスト GM

前田 史子 株式会社 企業実務アシスト

村山 和美 株式会社 企業実務アシスト

【選考活動】

今井 義典 立命館大学客員教授
小野 元 京都大学大学院修士過程
金谷 憲 東京学芸大学 名誉教授
関口 和一 日本経済新聞 論説委員
竹本 秀人 国際ウェールズ環境総研
代表

田邊 和子 日本女子大学教授

丹羽 秀夫 公認会計士

山田 勝 日米学生会議
同窓会副会長

勇元 信彦 同志社大学大学院
グローバル・スタディーズ
研究科・アメリカ研究所
事務局 係長

【防衛大学校研修】

國分良成（防衛大学校学校長）、加藤健（防衛
大学校准教授）、大井昌靖（二等海佐）、

吉田 千絵 防衛大学校 総務部総務課

真中 萌 防衛大学校 113 小隊

【秋田研修】

橋口 昌道 秋田県 副知事

進藤 隆男 秋田県庁 学術振興課

淡路 孝也 藤里町議会議員

淡路 和春 藤里町役場

佐々木 吉昭 藤里町役場

菊池 孝子 藤里町社会福祉協議会

袴田 俊英 月宗寺 住職

新川 泰道 宝昌寺 住職

浅利 幸明 藤里町

淡路 昭芳 藤里町

石岡 千代志 藤里町

菊池 昇一 藤里町

細田 茂廣 藤里町

斎藤 栄作美 世界遺産センター藤館

白神山地アドバイザー

菊池 整 エスポワール

淡路 敬子 恵体験工房

伊藤 晴樹 ARC グループ代表

市川 博也 国際教養大学 教授

勝又 美智雄 国際教養大学 教授

熊谷 ひかり 国際教養大学 学生

John Arnold 国際教養大学 学生



【日米学生会議同窓会協力者】

秋間修 荒木尊士 伊井佐織 飯島千咲
 五十嵐淳 市川比呂也 市毛裕史 伊藤孝真
 井上敏之 井上聡美 今井義典 小田垣彩花
 上江洲仁美 烏賀陽正弘 梅崎涉
 遠藤繁 大高巽 大野峻典 岡本実
 小沢良明 小野元 大日方望 Kurt Tong
 川口真 川野さりあ 岸田守 木ノ上高章
 木村光太郎 Katherine Jordan 久保勲
 Kelly Cargos 五所恵美子 児玉克哉
 小松崎涼子 櫻井千浪 Sharon Lu 白畑春来
 神馬光滋 杉岡昌太 鈴木悠司 須藤俊男
 関口和一 高田修太 武田興欣 竹本秀人
 田中豪 辻喜久子 手島敬 富川秀二
 中澤耕己 中山智夫 西田尚弘 西元宏治
 野口ゆかり 野地洋平 橋本徹 橋本遥
 橋本萌 廣野允威 Patrick Meuer 福谷尚久
 藤田耕 Vu Hoang Minh 松尾恵輔 松本秀也
 Madison Mears 丸本美加 三科圭介
 茂木健一郎 森田修弘 守屋彰人 森泰子
 八木澤龍大 安川皓一郎 山下祐里奈
 山田勝 山本東生 渡部寛史

【事前活動協力者】

大山 利男 立教大学准教授
 遠藤 広樹 横浜市立横浜サイエンスフ
 ロンティア高等学校副校長
 大貫 優子 東海大学病院神経内科医師
 和泉 俊一郎 東海大学病院産婦人科医師
 森本 敏 拓殖大学特任教授
 前防衛大臣

細谷 雄一
 田中 均
 新井田 理恵
 早川 秀樹
 今里 譲
 石井 寅男
 関 裕行
 原 秀樹
 佐藤 幸治
 篠原 由香里
 小野 元
 熊倉 純子
 福島 安紀子
 松原 大輔

竹内 智洋

忽那 武範

慶應義塾大学教授
 株式会社日本総合研究所
 国際戦略研究所 理事長
 国家公務員
 多文化まちづくり工房代表
 文部科学省
 大臣官房国際課長
 浮世絵保存協会副理事
 日本芸術文化振興会 理事
 国際交流基金
 企画部 事業戦略課長
 国際交流基金
 総務部 総務課 課長代理
 国際交流基金
 文化事業部
 主任 米州チーム
 国際交流基金
 日米センター
 東京藝術大学教授
 東京財団
 立教大学
 現代心理学部映像身体学科
 4 年次
 日本 GE 株式会社
 フィナンシャル・マネジメ
 ント・プログラム
 公益財団法人 稲盛財団
 理事・事務局長



【ユースフォーラム・ジャパン】

愛知 和男

古澤 明子

小林 斐子

河原田 有一

木ノ上 高章

山本 東生

渡部 恒雄 東京財団上席研究員

Dr.Paul McCarthy 駿河台大学名誉教授

Kurt Tong 米国大使館首席公使

【賛助者】

橋本 徹

大塚 雄三

大高 巽

山本 修巳

山崎 繭加

森 佳子

市川 比呂也

小松崎 きよ江

窪田 良

高林 浩司

【賛助団体・企業、賛助者】

一般社団法人 日米協会

大阪日米協会

京都日米協会

秋田日米協会

公益財団法人三菱 UFJ 国際財団

公益財団法人双日国際交流財団

公益財団法人平和中島財団

アサヒグループホールディングス株式会社

伊藤忠商事株式会社

株式会社オリエンタルランド

オリックス株式会社

キッコーマン株式会社

キヤノン株式会社

J Xホールディングス株式会社

新日鐵住金株式会社

株式会社セブン&アイ・ホールディングス

禅林寺

デルタ航空会社

株式会社電通

東京海上日動火災保険株式会社

東京ガス株式会社

トヨタ自動車株式会社

中辻産業株式会社

株式会社ニコン

日産自動車株式会社

株式会社日本政策投資銀行

日本生命保険相互会社

日本電信電話株式会社

野村ホールディングス株式会社

パナソニック株式会社

株式会社日立製作所

富士ゼロックス株式会社

富士通株式会社

ベイビュー・アセット・マネジメント株式会社

丸紅株式会社



株式会社みずほ銀行

株式会社三井住友銀行

三井物産株式会社

三井不動産株式会社

三菱地所株式会社

三菱重工業株式会社

三菱商事株式会社

株式会社三菱東京 UFJ 銀行

三菱 UFJ リース株式会社

メリックス株式会社

住友商事株式会社

日本郵船株式会社

ユニリーバ・ジャパン・ホールディングス

東燃ゼネラル石油株式会社

協和発酵キリン株式会社

楽天株式会社

オタフクソース株式会社

ANA ホールディングス株式会社

ソフトバンク株式会社

マイナー財団

※役職・団体の名称等は当時のものです。



Publicity パブリシティ一覧 (2013-14)

『日米共同声明』外務省 (2014 年 4 月 25 日)

外務省
Ministry of Foreign Affairs of Japan

本文へ | English | Other Languages | リンクページ | よくある質問集 | サイトマップ

文字サイズを変更   

フリーワード検索  検索

詳細検索 | 検索方法

外務省案内 | 渡航関連情報 | 各国・地域情報 | 外交政策 | ODA (政府開発援助) | 会談・訪問 | 報道・広報 | キッズ外務省 | 史料・公開情報 | 各種手続き・御意見

トップページ > 各国・地域情報 > 北米 > アメリカ合衆国 > オバマ・アメリカ合衆国大統領の来日 > 日米共同声明: アジア太平洋及びこれを越えた地域の未来を形作る日本と米国

アメリカ合衆国

日米共同声明: アジア太平洋及びこれを越えた地域の未来を形作る日本と米国

平成26年4月25日

英語版 (English)

ツイート

274

いいね

430

メール

これら政府のプログラムは、日米協会、米日カOUNシル、400以上の姉妹都市関係など両国国民をつな
 いる。そのようなプログラムは、多数の学術機関、大学間のつながり、皇太子明仁親王奨学金、日米交流
 今年80周年を迎える日米学生会議のような民間資金による交流と同様に、不可欠なものである。日米両国
 て拡大された非政府対話を更に奨励する。

『交遊抄 日米学生会議 今井義典』日経新聞 (2014 年 11 月 12 日)

交遊抄

日米友好の
 ある日、奇縁の人に会わ
 絆を学生が担
 う日米学生会
 議が今年80周
 年を迎えた。

満州事変で悪化した日米
 関係を若者の手で修復し
 よつと1934年に米国
 に渡り、現地の学生に呼
 びかけたのが始ま
 りである。

太平洋戦争など
 で2度中断した
 が、64年に復活。

私が参加したのは
 ベトナム戦争真っ
 直中の65年だっ

た。戦争の是非な
 どを巡り、口角泡
 を飛ばしながら米

国人学生と初めて英語で
 議論した充実感、今も
 忘れられない。

米通商代表部 (UST
 R) で日本担当を務めた
 グレン・S・フクシマさ

んも米側の参加者だ。N
 たもの何かの縁といえ
 H Kの記者時代、日米通

商交渉で親しくなったが
 り11元NHK副会長)

日米学生会議

今井義典

橋本さんは日米

学生会議は人生に
 大きな影響を与え

たとして「ライフ
 ・チェンジング・

エクスペリエン
 ス」と呼ぶ。私も

同感である。日米
 関係の担い手がこの会議

から何人も巣立った。
 15日に80周年の記念式

典が開かれる。同窓会長
 を務める橋本さんのもと

で私が実行委員長となっ
 たもの何かの縁といえ

よう。(いまい・よしの
 縁といえ

商交渉で親しくなったが
 り11元NHK副会長)



『主張 日米学生交流の原点 住友商事グローバルリサーチ社長 高井裕之』

日刊工業新聞 (2014年10月27日)

(第3種郵便物認可)

日 刊

Person

歴史ある日米学生会議が今年で80周年を迎え、11月15日に東京で記念式典が開かれる。会議のOB・OGをはじめ今まで日米関係構築に尽力されて両国の要人が集まる。式典に併せて行うシンポジウムでは、日米協会の藤崎一郎会長による基調講演のほか、私を含めた日米の会議OB・OGで日米交流の意義に関するパネルディスカッションを行う。

多士済々の顔ぶれ

日米会議は学生による日米交流の中では最も歴史が古く、第二次世界大戦前の当時、満州事変で悪化した日米関係を憂慮した学生有志によって創設された。太平洋戦争による中断を経て戦後に再開し、通算80年続いている。会議の運営はすべて両国の学生の

日米学生交流の原点

住友商事グローバルリサーチ社長 高井 裕之



実行委員によって行われ、日米で選考された約80人の学生が約1カ月間合宿してさまざまなテーマでの議論を行いながら各地を回る。会議は毎年夏に日米交互に開かれ、来年の第67回会議は日本で予定されている。同会議は数々の人材も輩出している。宮沢喜一元首相やキッシンジャー元米国国務長官、若手では在日米大使館で首席公使を務めたカイト・トン氏ら、日米両国の各方面で活躍するOB・OGが多数おられる。



このコラムの読者にも先輩や後輩がおられるのではないだろうか。

会議創設時は「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米の平和にある。その一翼を学生も担うべきだ」という理念の下、4人の学生使節団が渡米し、全米各地の大学を訪れて参加者を募り、総勢99人の米国代表団を伴って帰国。青山学院大学で最初の

主張

会議が開かれた。使節団は会議後に中国東北部に渡り、現地視察もしている。まさに政府に頼らない学生主導の草の根外交のはしりと言えよう。

このコラムの読者にも先輩や後輩がおられるのではないだろうか。

あれから80年、太平洋戦争や日米貿易摩擦などを乗り越え、政治・経済両面で日米関係は強固な同盟関係へと発展した。その間、さまざまな階層で日米間の交流が行われたが、やはり両国関係を底辺で支えてきたのは民間の地道な交流であり、利害関係のない学生同士の自由闊達な議論を通じて友人関係が日米関係の裾野を形成してきたと言って過言ではない。

「会って話す」80年続く友好

世界がインターネットでつながり、英語が堪能な日本人や日本語が堪能な米国人が増える中、日米両国の学生が毎年集まって会議を行ってこれほどの意味があるのかという議論もある。しかしながら、ネット社会だからといって実際に人間同士が会って話す場の重要性が高まっている。ネットは炎上すれば修復不能だ。しかし実際に会って話せば大抵は分かり合える。80周年を迎えた日米学生会議だが、財政状況は決して楽ではないと聞く。ぜひこの恩の長い国際交流に賛同いただける方にはご支援をお願いしたい。

(東京都中央区晴海1-8の11)

たかい・ひろゆき 80年(昭55)神戸大経営卒、同年住友商事入社。08年理事金融事業本部長、11年理事エネルギー本部長、13年住友商事総合研究所(現住友商事グローバルリサーチ)社長。大阪府出身、56歳。



『THOUGHT LEADERS POLITICAL ISSUES by Glen S. Fukushima』Forbes Japan (2015年1月)

THOUGHT LEADERS 02 POLITICAL ISSUES by GLEN S. FUKUSHIMA

Developing Future Global Leaders

将来のグローバル・リーダーを育てる

2 014年11月15日、日米学生会議の設立80周年を記念して、祝賀会が開かれた。日米間で学生の運営する交流プログラムとしては最も歴史のある会議である。祝賀会には、高円宮妃殿下をはじめ、両国政府高官、数多くの同窓生が、この卓越した会議の歴史と遺産を讃えるために出席した。本会議は、1934年に、当時悪化する両国政府の関係を危惧した学生たちが、日米間の理解と友情を深めようと理想に燃えて設立したものである。残念ながら、実際には、この7年後に日米は宣戦布告し、戦争に突入することとなった。

日米学生会議は、数多くの著名な同窓生を輩出している。アメリカから

は、ヘンリー・キッシンジャー元国務長官が、ハーバード大学の学生であった1951年に参加。日本の同窓生の中には、故宮澤喜一元首相が、東京帝国大学の学生時代、1939年と1940年に参加している。

1992年1月8日、東京でのジョージ・H・W・ブッシュ大統領歓迎の晩餐会で、宮澤喜一元首相は、1939年に南カリフォルニア大学で開催された日米学生会議に出席し、その際2つ「手に入れた」ものがあると言っている。第一は、アメリカの民主主義についての理解。アメリカの学生が自国のアジア政策を平気で批判するという自由で開放的な空気は宮澤元首相に強い印象を与えた。第二に「手に入れた」ものは、とくに「座っている妻」。ロサンゼルスに向かう船の中で津田塾大学の学生と出会い、東京大学を卒業し、大蔵省入省後に結婚したとの話だった。日米学生会議で同様に結婚したカップルが多く、「日米結婚会議」と呼ばれていた時期もあったほどだった。

筆者自身も、宮澤氏同様に、スタンフォード大学の学生のときに、1970年のスタンフォードでの会議に出席し、そこで出会った女性と、1971年の東京での会議も一緒に出席し、1972年の秋に結婚した。日米学生会議への出席が、私たち二人の人生に大きな影響を及ぼした。



GLEN S. FUKUSHIMA

グレン・S・フクシマ

米国先端政策研究所 (CAP) の上級研究員。米国通商代表部の日本・中国担当代表補代理、エアバス・ジャパンの社長、在日米商工会議所会頭等を経て現職。米日カウンシルや日米協会の理事を務めるなど、日米関係に精通。

その後、私はハーバード大学大学院で日米関係について学び、1985年に米国通商代表部に入省したが、その15年も前に日米学生会議で日米交渉の雰囲気を知り、日米両国での長年の友人を得ることができ、幅広い同窓生ネットワークに入ることもできた。日本政策投資銀行社長、元富士銀行頭取で、日本日米学生会議同窓会会長の橋本徹氏も敬愛する同窓生の「先輩」である。

日本が世界に貢献するためには、理想主義、現実主義、グローバルなマインド・セットを兼ね備え、多様な個人やグループと一緒に成果を上げられるリーダーの育成が不可欠である。日米学生会議の4週間にわたる

質の高い経験により、大学生はスキルや能力を伸ばすチャンスを得られる。議論や討論のトピックスは、タイムリーかつ重要であり、参加者は多様な背景を持つ学生と切磋琢磨し、相互理解を図る。そして、会議の運営自体が学生に任せられていることから、プログラムの成否は学生自身の責任となる。

日米学生会議が重要な役割を果たしてきたことから、バラク・オバマ大統領と安倍晋三首相は、2014年4月25日の日米首脳会談後の共同声明の中で、日米学生会議を「不可欠な」二国間の交流プログラムであると讃えた。

2015年は、第二次世界大戦終結から70周年の節目の年となる。この記念すべき年を祝うために数多くの催しが行われる。そこで大切なのは、1945年以前に、何が起きて何が起こらなかったかを議論することではない。重要なのは、この70年間に日本が国際社会で建設的な役割を果たしてきたこと、今後どんな役割を果たせるかということだ。日本が将来もグローバルな役割を果たすことができるか否かは、大志を抱き、優秀な能力を持つ次世代の日本のリーダーにかかっている。そのためには、日米学生会議をはじめとするグローバルなリーダーシップ養成プログラムを支援することで、現在のリーダーが、今後のリーダーとなる若者を育成することも必要ではなかろうか。①



第 66 回日米学生会議 活動報告書

発行日 2015 年 2 月

編集者	大西 由起	大沼 雄貴
	兼子 莉李那	木村 優吾
	小松崎 遥平	古村 大和
	鈴木 健司	関口 響

発行 日米学生会議報告書編集委員会
〒160-0004
一般財団法人国際教育振興会内
日米学生会議事務局

印刷 キンコーズ・ジャパン株式会社